天秤の月

宗像竜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天秤の月

【Ｎコード】
Ｎ１７５３Ｔ

【作者名】
宗像竜子

【あらすじ】
ある日、突然世界を統べる皇帝が乱心した――。
実の父に命を狙われ、自らが生き延びる為、そして乱された世界を再び正す為、自ら剣を取る道を選んだ皇女ミルファの物語。

序章（1）

＞i２３６３６―１４５８＜

月が、泣いている。
赤く染まって、嘆いている。

「……ハハ……アハハハ……！」

鼓膜を振るわせるのは、狂気じみた哄笑。
笑っているのに、どうしてだろう、まるで苦しんでいるように聞こえてくるのは。

――　月が、見下ろしている。

そう言えば、いつか聞いた。
月が満ち欠けを繰り返すのは、それが陰陽の天秤を司るからだと。

光は影なしには存在出来ず、影もまた光なしには存在出来ぬ。時には光が、時には影が重みを増す事があろうとも、それはやがて元の重みに戻ってゆく。
それこそが、自然の摂理。
互いに影響し合い、それぞれにないものを補い合うのは、光と影のみにあらず――。

そんな事を話してくれたのは、果たして誰だっただろう。
「…滅びるがいい……」
軋むような声が、呪詛を紡ぐ。
「絶えてしまえ…こんな、世界なぞ……！」

窓から差し込む月の光が、大きな黒い影を浮かび上がらせていた。
人の、影だ。
その足元にも、また一人。けれどもその影は力なく横たわり、もう二度と動く気配を感じさせない。
ふと風に乗って、何処かで嗅いだ事があるような生臭い匂いが届いてきた。
これは、一体何だろう。一体、『誰』の。
正体がわかっていながらも、頭は働かず、そんな事だけを思う。
ふと、影がこちらを振り返った。
逆光でその表情は見えない。けれどもその顔は、自分のよく知る人のもののはずだった。誰よりも敬愛する人のもののはずだった。
…なのに。
どうしてそこから、恐怖しか感じないのだろう…？
扉の影から覗いているのに気付いているのか、いないのか。その影はまるで獲物を求める獣のように、ゆっくりとした足取りで自分の方へ向かって来る。
（…逃げなきゃ）
迫ってくる人影に、凍りついた心がそう命じる。
けれども足は竦んで動かない。目の前にある光景が、悪夢のようにしか思えなくて、この期に及んでまだ信じようとする。
やって来る人が、自分を害するはずがないと。
あと僅かで扉が開かれる――　そう思った時、不意に誰かに強く手を引かれた。
強引に扉から引き離されたかと思うと、そのまま横の小部屋に連れ込まれる。そこは衣裳部屋で、奥に潜り込めばおいそれとは見つからない。
まだ思考の追いつかない自分の身体を、あまり大きさの変わらない誰かが抱きかかえるようにして奥へと連れてゆく。
何者か確かめなくても、その人物に恐れは感じなかった。
この部屋が隠れるのに絶好の場所だと知るのは、自分と母以外で

はあと一人しかいないのだから。
言葉一つ交わさなかった。何が起こっているのか、どうしてこんな所に隠れなければならないのか、そんな事を尋ねる事も。
…ただ庇うように身体に回された温もりに、そう言えばこんな風にこの人が自分に直接触れたのは一体何年ぶりだろう、そんなどうでもよい事を考えるばかりで。

そしてふと気が付くと、意識は闇に堕ちていた。

＋　＋　＋

…ザアアア……アアア……

雨が激しく地面を叩いている。

……オォ…ォォ……

遠くで風が吼えている。
「……」
ぽたりぽたり、と地面に滴り落ちる雨の雫を踏みしめて。
彼は大事に大事に抱えていたそれを、そっと目の前にあった古びた椅子に座らせた。
「…はあ……」
緊張の糸が、瞬間切れる。思わずついた吐息を恥じるように、彼はすぐさま表情を改めた。
――　まだ、何一つ終わっていないのだ。
ぐるりと見回せはば、そこは古ぼけ、煤(すす)けた壁に囲まれた小さな部屋だった。否――　小屋と言っても過言ではない。何しろその部屋以外には、部屋と呼べる場所は他にはないのだから。

屋根は低く、しかも隅は破れて穴が開いていた。激しく降りつける雨をそのまま受け入れ、その辺りはすっかり水溜りになっている。
床は板を張られておらず、剥き出しの土のままだった。雨のせいか、それとも元からか、じわりと土独特の臭いが立ち上がり、その狭い部屋に篭りつつある。
廃屋――　おそらくは、そう表現できる場所。
彼は周囲を用心深く見回した後、再び椅子の上に下ろしたものへ目を向けた。
厚手の布を被り、さらにその上に半分破れかけてはいるものの、まだ何とか形を保っている雨よけのマントを被せられたそれは、激しい雨の中を来たとは思えない程に濡れた様子は見られない。
唯一、外から来た証があるとしたら、そこから覗く二本の細い足にある華奢な靴が、部分的に濡れた土で汚れている事くらいだろうか。
…それは、一人の少女だった。
彼はそっと被さっているマントと布を取り、彼女がまったく濡れていない事を確認する。
対照的に彼はと言えば、頭からずぶ濡れとも言える有様で、動くだけで腕や髪から雨の雫が落ちてくるような有様だった。
体温を雨に奪われた為か、唇は色を無くし、指先も小さく震えている。それでも彼は少女が雨に濡れずに済んだ事がわかると、心底安堵したようにその強張った口元に微笑みを浮かべたのだった。
（良かった、良かった、良かった……）
心の中で繰り返す。
濡れて冷えているだけでなく、今までの道中ですっかり雨と泥とで汚れた手を取り去った布で出来るだけ綺麗に拭うと、そっと僅かに乱れていた少女の足元を整えた。
そうされている間、少女は身動き一つしない。まるで等身大の人形のように、じっと椅子に座っている。
年の頃は十二、三歳程。

漆黒の黒い髪は長く、緩やかな波を描いて背と肩を流れ、長い睫毛に縁取られた大きな目にあるのは、淡い緑の瞳。
それは光の下では更に透きとおり、さながら宝石のように輝くが、今は暗く沈んでいる。…瞬き一つ、しない。
花びらのような唇は固く結ばれ、かつては薔薇色に染まっていた頬は蒼白だった。
――　少女は生きながら、同時に死んでいた。
呼吸はしているし、心臓も動いている。けれど、その中にある精神(こころ)が完全に現実を放棄していた。
「…ミルファ……」
彼はそっと呼びかける。
けれど、やはり少女は無反応だった。その様子を痛ましげに見つめながら、彼は自らの唇を噛む。
(――　どうして、こんな事に)
思い返すのは、ほんの一日前に起きた惨劇。
取り返しのつかない事態になってしまったと判明した後ですら、誰一人それが起こった事を信じきれずにいた。
…もしかしたら、それを引き起こした張本人ですら、その瞬間まで自身に生じつつあった変化に気付いていなかったのではないか、そう思える程に信じがたい出来事だった。
(急がなくては)
…雨音は次第に激しさを増し、世界からそれ以外の音を消し去る勢いだ。それだけが唯一、彼にとっての救いだった。
(…ミルファ)
何一つ瞳に映さない少女に、心の中で語りかける。
(もしかしたら、僕がこれから行う事は…君を苦しめるだけかもしれない)
瞳は少女に向けたまま、震える指で濡れた服の胸元を探る。
やがてチャリ、と小さく金属の触れ合う音と共に、首からかけていた鎖が引き出された。その先にあるのは爪の先程の大きさの、空

の色をした珠。
それは、この世界における神の祝福を受けた者のみに与えられる、『聖晶』と呼ばれるものだった。一人一人形と色が異なり、生まれ落ちたその時に、その手に握って生まれてきたもの。
誰もが持つ物ではない。実際、世界を支配し統べる皇帝すらも所有してはいなかった物だ。それを…首から外す。
（君は、僕を憎むかもしれない――　それでも）
決意を込めた瞳は、少女から掌にある珠に移り、また少女に戻った。そして一瞬躊躇った後で、それを少女の無防備な膝の上にそっと乗せた。
「…感傷、かな」
ぽつりと呟く。
浮かんだ苦笑は、嘲笑を帯びていた。この期に及んで、まだ迷いのある自分を嫌悪するかのように。
「……」
神の守護を取り去り、もはや彼を守るものは何一つない。
彼の指がまた動き、今度は腰の辺りから細い短刀を取り出す。護身用とも呼べない華奢なそれは、それでも彼の望みを叶えるには十分だった。
鞘を抜き、刃を確かめる。
…曇りもなく、刃こぼれもない。それを確認すると、彼は一度深呼吸した。
そして。
「……ッ！」
一息に、短刀を持つ手とは反対側の手首を切り裂いた！
「…メイ…カリェン…ダルーナ・マティオス……」
溢れ出す鮮血をそのままに、彼は言葉を口にする。その声は微かに震え、雨音に紛れそうなほどにか細かった。

「グリナ…ラーナ・セルヴ…――」

ぽたり、ぽたり、と血は決して浅くはない傷口から溢れ、剥き出しの地面に滴り落ちる。

薄闇にも鮮やかなその赤は、たちまち地面に吸われ、どす黒い色へと変化した。その場にあった土の臭いは、鉄錆びたような血のそれにとって変わられてゆく。

「…カリェン・イ・ウェルシュ・ムーザ…イスト・ケルプ・ラーナ・ソアラ！！」

最後は思いの全てをぶつけるような勢いで紡がれた言葉は、瞬時に彼の求める現象を引き起こした。

「…っ！」

手首に鋭い痛みが走り、歯を噛み締めてそれに耐える。

一体いつの間に現れたのか、そこには一匹の蝙蝠が張り付き、溢れる鮮血を啜り上げていた。彼はそれを驚いたように凝視し、やがてその口元に歪んだ笑みを浮かべた。

――召喚は、成功したのだ。

やがてひとしきり彼の血を吸った蝙蝠が、ばさりと飛び上がる。そして。

《…神の稚児（ちご）よ》

蝙蝠の口から、神経に障る『声』が紡がれた。

《その血を我に捧げ、その命を代償に何を求める》

彼はその問いかけに迷う事なくこう答えた。

「――　我が主に、玉座を」

序章（2）

…虚ろだった瞳に、ゆっくりと生気が戻り始めた。
頬に赤みが差し、固く結ばれていた唇が綻ぶ。やがて数度瞬きをした少女は、見慣れぬ周囲の様子に怪訝（けげん）な顔をした。
ここは何処だろう。なんて古ぼけて汚い場所だろうか。
雨音がやけに大きく聞こえると思ったら、屋根に穴が開いているし、何か異臭がすると思えば、足元には床ではなく土がそのまま剥き出しになっている。
――　こんな場所は、知らない。
「…お目覚めですか、我が君」
「！」
突然声をかけられて、その薄い肩が跳ねる。
聞こえてきた声と言えばひび割れ、まるで地面の底からのもののように低く掠れている。…聞き覚えのない男、それも老人の声だった。
声の方――　背後にそろそろと目を向け、少女はぎょっと目を見開く。
そこにまるで闇を人の形にしたような人物が、影のようにひっそりと佇（たたず）んでいたからだ。
頭からすっぽりと赤みを帯びた黒い布を被り、かろうじてその輪郭で人である事がわかるものの、顔は元より、その下にどんな姿が隠されているのか全くわからない。
「…だ、誰だ、そなたは？」
それでもここで臆する事を恥じる誇りと勇気を総動員して、あえて居丈高に誰何（すいか）すると、影のようなそれはゆらりと頭を垂れ、先程の不気味な声でぼそぼそと答えた。
「我に…貴女様に告げられるような名などございませぬ」
「…どういう意味だ？」

不審も露に眉根を寄せる少女に、それは答えなかった。
ただ、布の隙間から出した白く痩せ細った、まるで骨そのもののような手を胸に当て、従僕が主人に対して取る礼を取るばかり。
「――　わたくしを、主だと？」
それはゆっくりと頭を縦に振った。
少女は困惑する。一体、何がどうなっているのだろう。自分が今、何故こんな狭く汚い場所にいるのかさえよくわからないのに――。
するとその困惑を読み取ったように、それは再び口を開いた。
「…皇帝が乱心なさいました」
「――　何…？」
聞こえた言葉に、自分の耳を疑った。
「現在、皇帝はその血に連なる全ての者を絶やそうとなさっております。…すでに七人おられた皇子及び皇女殿下の内、お二人は河岸をお渡りになられました」
「…ばかな……」
それの陰々と響く声が紡いだ話は、到底信じられるものではなかった。
『二人は河岸を渡った』と言った。つまりそれは…　自分の上に六人いた兄と姉の内、二人がもうこの世の者ではないという事だ。
その全てと仲が良かった訳ではないが、血の繋がった兄姉だ。死んだと聞かされて平静でいられるはずもない。
…それ以前に。
皇帝――　すなわちそれは彼女の実の父のこと。
時として非情な決断を下す事もありはしたが、大体において優れた治世を敷き、名君の誉れも高かった。そして少女にとっては、もっとも敬愛する人だ。
強く、厳しく――　そして優しい父。その人が…自分や兄弟を殺そうとしているなど、どうして信じられるだろう。
しかし黒衣の人物は、そんな彼女の心を見透かしたように更に言葉を重ねる。

「皇帝は…この世界すらも滅ぼしておしまいになるおつもりです。《開闢(かいびゃく)の間》の封印が解かれ、《陰陽の秤》は壊されました。…かくなる上は、出来るだけ早急に現皇帝を廃し、新たな皇帝を立てるより他はございませぬ」
「…何を根拠に、そのような事を……！」
「根拠は、これに」
「！？」
怒りに任せて椅子から立ち上がった彼女に、それはずい、と何かを突きつけた。
思わずそれを凝視した少女は、やがてその顔を蒼白にして絶句する。それは鏡の破片だった。しかしただの鏡ではない。
人の姿ではなく――　過去や未来を選ばれた者に見せる特殊な術がかけられていると言われていたもの。
実際、どんなに覗いても背後の風景は映っているのに自分の姿は映らず、心底不思議に思った事を思い出す。
かつて、《開闢の間》と呼ばれた封印の間の入り口にあったものだ。数えるほどしか目にした事がないが、特殊な文様を端に刻まれたそれを見紛うはずがない。
それが割れてここにあるという事は、すなわちその部屋の封印が解かれたということ――。
その封印が具体的にどんな意味を持つのかまでは知らないが、その封印が定められた手段以外で解かれた時、未曾有の災害が起こると言い伝えられていた。
「…そんな……」
呆然と立ち尽くす幼さをまだ色濃く残す少女に、それは静かに告げた。
「――　皇帝の御座につかれませ、皇女ミルファ様」
「…わたくしが……？　…お前はわたくしに、父を殺せというのか！？」
言葉の重さに青ざめる少女――ミルファに、それは怯(ひる)む事なく言

葉を返す。
「これよりこの世は地獄と化しましょう。光と影の均衡が崩れた今、闇に葬り去られたはずのものも目覚め…数多の命が失われてしまうに違いありませぬ。それを止められるのは、新たな皇帝だけです」
「兄や姉がいる！」
「…他の御兄姉もその内動かれるでしょうが…わかっておられるか。もっとも年若い貴女だからこそ、皇帝は簡単に命を奪えるとお思いになっておられる」
「…っ！」
「――　直に刺客がここにも来るでしょう。だが、その数は恐らく他の皇子・皇女殿下へのそれよりは数少ないはず」
　つまり――　逆を考えるなら、もっとも生存率が高いのは彼女だということ。幼いから…非力だからこそ、効率を重んじる皇帝は精鋭をこちらには向けてこないに違いない。そう言っているのだ。
　皆まで言われずとも、聡い彼女にその意図は伝わった。
「…お前は、一体何者だ？」
　まだ顔は青ざめていたものの、先程よりは心は落ち着いていた。
「何故――　わたくしを主と呼ぶ？」
「……」
　それは答えなかった。
　沈黙したまま礼を解くと、手にしていた鏡の破片を改めてミルファに差し出す。
「…御覚悟はつかれましたか？」
　やはり地面の底から聞こえてくるような陰気な声が、逆に尋ねる。
　しばらくじっとその表情の見えない顔の辺りを見つめ――　そしてミルファはその破片を手にした。
「…わたくしだって、死にたくはない。父を殺す事は…まだ決心はつかないが、皇位を目指す事が生き延びる唯一の道だと言うのなら――　進むしかない」
　その苦い答えに、それは微笑んだようだった。

おや、と思う。
当然ながら表情は見えないが、そんな外見には似つかわしくない柔らかな空気が生まれたような気がして。
けれど次の瞬間にはそれは消え失せる。それは恭しく頭を垂れると、厳かに言った。
「ならば、僅かなりですが助力いたします」
「助力？」
「…この身が滅ぶまで御身のお側に仕える事をお許し下さるのなら、何人にも御身を傷つけさせない事をお約束いたしましょう」
言われた言葉は途方もない事で、ミルファは目を丸くした。
目の前の細い体。背は彼女のそれよりも随分高いが、唯一目の当たりに出来る手の様子から見て、どう考えても力のなさは大して変わらないように思える。
そんな形で、どうやって父の手から放たれるだろう、屈強の刺客を退けると言うのか。
けれど…父に命を狙われ、周囲に他に頼れる人間が一人もいないこの状況で、助力を申し出てくれる存在はありがたい。それに自分以上に実情に通じている。
何者かもわからないし、ひょっとしたら人間ですらないのかもしれないが――　ミルファは決意した。
「わかった、許そう。そなたの働き…期待している」
不安もある、信じたくない気持ちも強い。
だが真実を知るにはまず、何よりこの場を切り抜け、生き延びなければならない。目の前の人物が何者だろうと、要は完全に心を許さなければいいのだ。
そう思いながら、黒い布に隠れて見えない顔を辺りを真っ直ぐに見つめる。するとそれは暗い声に微かな喜びを漂わせて答えた。
「…ありがたき幸せでございます」
その一瞬、表情を隠す布の隙間からそれの目が見えた。
不思議な色合いの、青。紫や緑を微かに帯びた…まるで、空のよ

うな。
（――？）
感想を抱いた瞬間、何かを思い出しかけた。
けれどもすぐにそれは消え失せた為、ミルファはすぐに気のせいだと片付けた。状況が状況だけに、ゆっくりと物思いに耽る余裕がなかったとも言えるが。

＋　＋　＋

こうして世界を治めるべき皇帝の乱心は、それまで平穏だった世界を混乱に導いた。
自ら血を分けた子の命を狙う皇帝と、その凶行を止めようと抗う皇子・皇女の争いは、次第に世界全てを巻き込んで発展して行く事になる。
長い…実に十年にも及ぶ混沌の時代はこうして幕を開けた――。

第一章　皇女ミルファ（1）

＞i24883―1458＜

しん、と水を打ったように静まりかえった内庭に続くバルコニーの扉を開く。
ほとんど軋む音などしなかったし、まだ外へ姿を見せてもいないのに、静寂は盛大な歓声で打ち破られた。

「ミルファ様！」
「皇女殿下！！」

口々に彼女を呼ぶのは、決して狭くはない内庭に所狭しと立ち並ぶの戦士達だった。
男もいる、女もいる。
老人もいれば、中にはまだ戦うには早いのではないかと思えるような子供の姿まで。
それをぐるりと見回して、ミルファはバルコニーへと足を踏み出した。わあっとひときわ声が高まる。それに微笑みで応え、ミルファはしばし場が静まるのを待った。

「…我が、忠実なる兵士達よ」

引き潮のように歓声が見る間に小さくなるのを確認して、ミルファは口を開いた。
そこから零れ落ちるのは、凛とした涼やかな声。甘さはないが、代わりに聞くものに一種の感銘を与える、選ばれたごく一部の人間だけが持つ声だ。

「集まってくれて、ありがとう。心から礼を述べます。…すでに話は聞き及んでいるかと思いますが、狂帝の軍がセイリェンの地まで迫りつつあります」

決して張り上げている声ではないのに、彼女の声は内庭にいる全ての者へと届いた。老若男女、そこに集う全ての者の顔に緊張が走る。

――　狂帝。

それはかつてこの世界をよく統べ、名君とも呼ばれた人物のこと。

ある日突然乱心し、四方の地――　帝都を中心とし、方角に合わせて北領、東領、西領、南領と呼ばれる地方――　より嫁いだ四人の后を全て惨殺し、更に血を分けた我が子までも殺そうとしている男のこと。

…ミルファの、実父。

彼が引き起こした災厄は、まだ記憶に生々しい。すでに七人いた皇子・皇女の内、半数以上が実の父によってその命を散らしていた。

当然、彼等もただ殺された訳はない。自分の命を守る為、そして凶行を働く父を諌める為、自ら武器を取り戦った者もいるし、身分を偽り姿も名も変えて、各地を逃げ惑った者もいた。

それでも――　皇帝はいかなる手段を持ってか、自ら動く事なく彼らを追い詰め、その罪なき命を奪い去ったのだった。

そればかりではない。その戦いに巻き込まれ、家や家族を失った民の数も相当の数に上った。

追い討ちをかけるように、遠い昔に闇へと葬り去られたはずの魔物が現れ、そうして寄る辺を失った人々を襲い、民もまた恐怖と混乱に叩き落されたのだった。

「かの地は、この南領の要所。落とす訳には行きません」

ミルファの言葉を真剣に聞くのも、彼等にとて今の状況を何とか

したいと思っているからに相違ない。その事を心強く思いながら、ミルファは腰に下げていた細剣を空に向かって捧げ持った。

「…進軍せよ！」

彼女の号令に応え、全てが動き出す。

兵士、そしてそれを指揮する指揮官、彼らを補助する斥候、そして医療に従事する施療師と医師が、それぞれに応じた働きをする為に――　自らの忠誠を捧げた彼女の為に戦いの場に赴く。

命の保障のない、戦いの日々。けれども彼等にとって、それはすでに日常茶飯事になっていた。

＋　＋　＋

「…お疲れさまです、ミルファ様」

中庭に面したバルコニーから室内へと退くと、彼女の背にひっそりと陰鬱な声でそんな言葉がかけられた。

「何を言う。ただ号令をかけただけだろう。私自身はなんら疲れるような事はやっていないが？」

ミルファはその声に驚いた様子も見せずに、淡々とそんな返事を返す。

「……」

その言葉に鼻白んだ訳ではないだろうが、背後の人物は沈黙した。ただ、気遣うような気配は伝わってきて、ミルファは小さくため息をつく。

「――　ザルーム。心配してくれるのはありがたいが、私はそこまで柔ではないぞ？」

くるりと振り返れば思った通り、見慣れた赤黒いローブをすっぽり被った長身の人物がそこに控えていた。

太古の言葉で『影』という意味を持つ名で呼ばれる彼が、こうし

て彼女を心配するのはいつもの事だったが、時折それが未だに子ども扱いされているような気がして、ミルファは訳もなく苛立つ。
「我が君…人の命を背負うという事は、自覚がなくとも重責でございます」
ザルームは表情を隠す布の向こうから、そんな事を静かに告げる。
「わかっている…！　だから無理などしてはいないではないか。…もう、あれから五年になる。お前は私を、まだ十二の子供と思っていないか」
「そんな事は……」
「いいや、絶対に思っている。…いいか、私はもう子供ではない。自己管理くらい自分で出来る！」
苛立ちを隠さずに一気に言い放つと、そのまま背を向け、後も見ずに部屋を出て行ってしまう。
…そんな風にむきになる辺りが、まだ彼女が十七歳の少女である事を示していたのだが、本人にはその自覚はなかった。彼は布の内で苦笑し、そして同時に思う。

――　もう、五年も経ってしまったのか、と。

＋　＋　＋

廃屋で主従の誓いを交わしてから、ミルファとザルームは共に死線を潜り抜けてきた。
今まで都の帝宮で何不自由なく育てられていたミルファが、こうして今も生きていられるのは、確実にザルームのお陰としか言いようがない。
出会った当初は得体の知れない容貌と言い、唯一目の当たりに出来る手の骨のような有様に、一体どれだけの事が出来るのやらと思っていたミルファだったが、間もなくその認識は改められる事になった。

彼は博識な上に、同時にとても強い力を持った呪術師でもあったのだ。
呪術師とは只人には持ち得ない人知を超えた力を有する者で、それまでそうした者との接点がなかったミルファはその存在を知らなかったが、市井では決して珍しい者ではない。
確かに今のような有事でもなければ、その能力の大半は普段の生活には役立たないものが多い。
手を使わずに物を動かす力や、何もない所から炎や水、光を出す力。あるいは、古から伝わるという秘術。
それらは人の病を癒す施療師や医師のように、人の役に立つものではない。
けれども、その異能と特殊な知識により、彼等はまた人々の中では特別視される存在でもあった。
年に数度ある祭事に彼等は必要不可欠だ。もはや絶えて久しい太古の言葉を諳んじられるのは彼等だけだし、供物となる獣を仕留める際、彼等の術は武器による攻撃よりもずっと確実だからだ。
そんな知識を知ったのは随分後の事だが、共に過ごす日々の中、気が付くと最初に抱いた警戒心は薄れ、今ではミルファにとってなくてはならない存在となっていた。
父から送り込まれる刺客から逃れながら、この亡き母の生地である南領へと辿り着いたのは、あの嵐のような晩から一年近くが過ぎようとする頃の事だった。
ここで、二年前の夏にミルファは挙兵した。弱冠十五歳にして、引き返す事の出来ない道へと足を踏み出したのだ。
周囲への呼びかけ、協力の要請に一年。
兵士を募り、その編成と訓練にまた一年――。
その間に祖父である前南領主が亡くなり、母の兄弟と共にその事後処理もせねばならず、五年の月日は瞬く間に過ぎていった。
七人いたはずの兄弟も彼女を除けば、現在二人しか生きていない。
五年の間に、様々な事があった。危うく死ぬ場面にも幾度も遭遇

したし、父の軍に勝てた事も、また逆に惨敗した事もある。
その全てがミルファを育てた。
今やミルファは、現皇帝に対して反乱の意志を持つ者の、絶大なる旗頭になりつつある。現皇帝の娘である事ではなく、ミルファ自身のその資質をもって人々に慕われているのだ。
…けれどもまだ、父である皇帝への道は険しい。今は南領を守り抜く事だけで手一杯の状態だった。
（焦りは、禁物）
廊下を突き進みながら、ミルファは自分に言い聞かせた。
…が、先程部屋に置き去りにしたザルームが、口癖のようにミルファに諭す言葉なのを思い出して僅かに唇を歪める。
今のミルファにとって、片腕とも呼べる存在。従者という意識は薄れ、もはや身内のような感情すら抱きつつある事を認識せずにはいられない。
…本当はわかっているのだ。
彼に対してそういう感情を持つべきではないと。何処の誰かもわからない人物だ。その素顔すら、未だにミルファは見た事がない。
あの誓いの後、彼は呼び名がないと不自由なら『影』と呼ぶようにと言った以外、自らの事を決して明かそうとはしなかった。
そこにどんな事情があるか知らないが、仮にも仕える主人に対して秘密が多すぎる彼を、頭から信用出来るほどミルファは愚かではなかった。
どのような意図があって、自失状態にあったミルファを帝宮からあの廃屋まで連れ出したのか。
どうして、多くいた皇子・皇女の中からミルファを主に選んだのか――。
…彼は何も語らない。
けれど最初の誓い通りに、彼はその力を如何なく発揮して、数々の危機からミルファを守ってくれた。無事に南領に辿り着いてからは、主に参謀として彼女の手助けをしてくれている。

決して表立って姿を見せようとしないので、限られた者にしか彼の存在は知られていないが、その働きがなければ、こんなにも早く挙兵は出来なかっただろう。
彼は本当にその名の通り影のごとく、ただ忠実にミルファに従う。必要以上に高圧的に接しても、決して激する事もなく――。
…だからこそ、気を許してはならないのだ。
心を許してしまった後、もし彼に裏切られたなら――　きっと、二度と立ち上がれない程に自分は打ちのめされる。そんな予感を強く感じるから……。

第一章　皇女ミルファ（2）

狂帝が何故、自らの血を分けた子を殺そうとしているのか――
その理由は依然不明のままだ。
ただわかっている事は、皇帝の目的はあくまでも皇子・皇女の殺害にあり、それぞれが逃亡した先――　ミルファの場合は、実母の実家だ――　を滅ぼそうとしている訳ではないこと。
事実、皇帝は宣戦布告する際に、攻撃する場所に対して、必ず次のような事を付け加える。
曰く――

『我が目的はその地に滞在する皇子（皇女）の身柄に過ぎぬ。その身柄をこちらに引き渡すのであれば、これ以上の進軍も侵略もない』

乱心したとは言えども、この世界を統べる皇帝の言葉だ。
その言葉に従い、その地の安全を守る為に、その地を頼った皇子を差し出した場所があった。
しかし、その地は確かに皇帝によって滅ぼされる事はなかったが、代わりに何処からともなく現れた魔物が横行し、最終的には多くの人命が喪われる事となった。
その二つの出来事は、客観的に見て関連性がない。
だがその事は、その後の人々の動向を決定的に変えた。
と言うのも、目に見えてわかる人災よりも、普通の人間には追い払う事もままならない魔物の出現の方を恐れたからだ。
そして、少なくとも現在、皇子・皇女が存在する北領を除く三方では、魔族出現の報告は皆無ではないがその出現率の差は歴然だった。
そこに何らかの関わり合いがあると考えるのは、人として当然の結果だろう。

…そうした例がなかったなら、場合によっては今頃ミルファも犠牲となっていたに違いない。
逆に言えばそうした例があったからこそ、彼女が南領に辿り着いた時、その地の民は彼女を暖かく迎えてくれたのだ。

＋　＋　＋

「…もう、五年……」
自室に篭ると、ミルファはぽつりと呟いた。
ふと目を窓の外に見える青空に向け、その唇に微苦笑を浮かべる。
あの空はここから遠く離れた帝都に続いている。その中心にある帝宮にいる父は、今も自分の死を願い続けているのだろうか。
――　そう考えるだけで、胸が痛む。
何度も命を狙われて、死地に遭遇したのも一度や二度ではないと言うのに、どうしていつまで経っても父の事を心の底から憎めずにいるのだろうか。
決して口にする事はないが、ミルファは挙兵してからもずっとその事を思い悩んでいた。
皇帝として多忙な日々を送るだけでなく、ミルファの母であった南領妃以外に三人の妻がいた事もあり、実際に父である皇帝と触れ合った記憶はそれほど多くはない。
けれどもその数少ない思い出の中、父は確かにミルファを可愛がってくれた。
遠乗りに連れて行ってくれた事もあったし、そんな時間がない時は一緒に中庭で花を眺めたり、他愛のないおしゃべりをした。
大きく暖かな手。自分の拙い言葉を、聞き流しもせずにきちんと受け止めてくれた大好きな父。
…そんな暖かな記憶を、どうしてもなかった事には出来ないのだ。
（何故、お父様は私達の命を狙うのだろう……）
そもそも、彼が乱心した原因もわからない。一体何が、父を変え

てしまったのか。
それ以前にミルファには、あの廃屋で目覚める以前、父が乱心した辺りの記憶がほとんど残っていなかった。何かを見た気もする。それも――　出来る事なら、見たくはなかったものを。
もしかしたら、その『何か』に父の乱心した原因の一端があるのかもしれないのだが、どうしてもそれを思い出せないのだった。
あるいは――　その可能性が大きいが――　自分で思いだしたくないと、心から願ったのか。
（…一体、私達の死にどんな意味があるのだろう……？）
魔物の出現と自分達の命に実際に関わりがあるのだとしても、それがどういうものかがわからない。
この南領に辿り着いてから、それなりに手を尽くして過去の文献などを調べたものの、芳（かんば）しい結果は上がらなかった。
考えれば考える程、重く沈んでいく心。無意識に手が動いて、ミルファは胸元をぎゅっと握り締めた。
華奢な身体を包むドレスは暗く落ち着いた色合いで、どちらかと言うと質素なもの。その布地を通して、指先は一つの感触を確かめる。
硬い、石のようなその感触に、ミルファの表情は僅かに和らぐ。
目は未だ窓の外に向けられたまま、けれどもそこに見ているものは、もう遥かな地にいる父の事ではなかった。
「…ケアン……」
そっと静かに呟いて、ミルファは服の下からそれを引っ張り出した。
爪の先程の、空の色をした丸い石。それを持ち上げると、ミルファはその石に面影を重ねるようにじっと見つめた。
「あなたは…今、何処にいるの……？」
無意識に口調は幼い頃のそれになる。
彼女の首にかけられて、普段は服の下に隠されているその石は、限られた人間だけが持つ『聖晶』と呼ばれるもの。

それはミルファ自身の物ではない。あの廃屋から逃げる最中、いつの間にかミルファの首にかけられていた物だ。その存在に気付くと同時に、それが示す意味にミルファは青褪めた。

それは守り石。神の祝福を受けて生まれた人間を、身の危険から守ると言われるもの。

それを本来の持ち主ではない自分が持つ事実、そして目が覚めたその場にその持ち主がいなかったという事実に、身体が震えた。

聖晶を持って生まれてきた者は、物心がつくと家族の元を離れて各地に置かれている神殿に入り、神官となる為の修行に入るのが常だ。

その神殿の最高峰が帝都にある大神殿で、そこに入るには相応の能力が必要になると言われている。

今、ミルファが持っている聖晶の本来の持ち主――　ケアンは、その大神殿の長く続く歴史上、最年少の記録を塗り替えて神殿入りした少年だった。

皇帝が乱心した当時、十四歳。ミルファより二つ年上の彼は、ミルファの遊び相手兼先生だった。

引き合わされたのは八歳の頃。

七歳にして大神殿に入ったケアンは、もうその頃には神官見習いとして日々の勤めを果たしており、大神殿の長である主席神官の覚えも良く、成人とみなされる十五歳を待たずに正神官になるのではないかと言われる程だった。

ミルファは彼から儀礼用の作法や、独特の表現や文法、言い回しを学んだ。

正式な神官でもない彼が教師として派遣されたのは、後に聞く所によると、神殿側の苦肉の策だったらしい。

他の兄姉と少し年が離れていた上に親しい友人もおらず、代わりに周囲の大人に甘やかされて育ったミルファの扱いは難しく、彼より年嵩の神官達が皆、匙を投げたからだ。

結果として、それはミルファにとっては良い結果に結びついた。

『神童』との誉れも高いケアンだったが、本人はどちらかと言うと内向的な、およそ傲慢さというものの対極にある人物だった。
年が近いという事、そしてその人柄で、ミルファは周囲が驚く程の早さで彼に懐いた。
ケアンも同世代の人間と接する事が皆無だったからだろう。ミルファを身分とは関係なしに、実の妹に対するように接してくれたと思う。
――　あの頃、帝宮で最もミルファの近くにいた人。
（…生きて、いるわよね……？）
ここに彼の聖晶があると言う事は、今の彼を守るものは何一つないということ。
神官として日々修行と勉学に勤しんでいた彼は、普通の十四歳の少年に比べれば非力で。
…恐らく、武器など扱えもしなかっただろう（それ以前に、神官は自ら殺生を行う事を禁じられている）。
あの狂乱の最中、自分に聖晶を託して彼は何処に消えたのか――。
ただ一つ希望があるのは、この聖晶の輝きが、今もなおあるという事だ。後に知った事だが、その一つ一つ違うという聖晶の色は、持ち主が死ぬと喪われてしまうらしい。
つまりこの空色がある限り、彼はこの地上の何処かで生きているということ。
（どうか、無事でいて）
その事を信じて、今は祈るしかなかった。何処かで生きているのなら、きっといつか再会を果たせる。そうしたら、この聖晶を返して礼を言うのだ。
本来の持ち主ではないミルファに、この聖晶は本来の守護の力を発揮する事はない。彼が何を思って、自分にそれを託したのかもわからない。
けれどもたとえ気休めに過ぎなくても、それを身に着けているだけで、確かに何かに守られているような気持ちがして心強く感じた。

時折襲いかかる孤独感や、押しつぶされそうな重圧を前にした時、この石は確かにミルファの心を救ってくれたのだ。

……――　否。

礼を言いたいだけではない。本心はただ、もう一度彼に会いたいのだ。

優しかった父と母を、形は違えども一時に喪ってしまったミルファにとって、過去の幸せが夢ではなかった事を知るのは、恐らくこの地上では彼だけしかいない。

残酷な悪夢にも似た現実を共有出来るのは、もう彼しかいないから――。

第一章　皇女ミルファ（3）

午後の会議は、当然ながら現在進軍中の軍に関する事を中心に進んでいた。

南領の都ライエから、主力部隊が目的地のセイリェンに着くまでに通常なら短く見積もっても十日はかかる。

その間の補給や情報管理をいかに短縮化出来るか、またその一方で敵方である帝軍の動きにも目を光らせなければならない。

…考える事は山ほどあった。

現在帝軍が不穏な動きを見せているのは、中央に存在する帝都とこの南領の境界となっている河、シェリス河に接する交易都市セイリェン。

その街は平常時では帝都と南領を繋ぐ流通の中心として、華やかで自由な気風で知られる街だった。

現在は帝都と南領との間に挟まれ、そこに流れる空気は必要以上に緊迫したものに取って代わられてしまっているが……。

混乱時の今でも人と物が数多く集まる場所だけに、そこに集まる情報も相当なものになる。

民の大半がそこで親やそれ以前の代から何らかの商いをしている商人で、その独自の情報網は過去に幾度かミルファも助けられたものだ。

だからこそ、セイリェンを見捨てる事も、帝軍に侵略させる事も許す訳には行かなかった。

「…失礼いたします！」

だが、順調に進んでいた話し合いは突如乱入したそんな声で中断した。

ノックをするのも忘れたのか、転がり込むような勢いで乱入して

きたのは、まだ十四、五歳程度の年若い少年だった。
赤毛でその身体はひどく痩せている。転んだら折れてしまいそうなその痩身を包むのは、まだ身体に馴染んでいない黒い官服。
仕官してそう日が経っていないのが、その挙動以外ですでにわかる有様だった。
その少年は一斉に自分に向けられた視線に一瞬怯んだ顔を見せたものの、自身の役目を思い出してか、蒼白の顔色でその場に跪き、発言の許可を待つ姿勢を取った。
「――　何事です」
少年の容姿から、最近この領館内の伝令職に就いた人物である事を記憶の奥から引っ張り出しながら、ミルファが殊更冷静な声で発言を許可する。
すると少年は弾かれたように立ち上がり、口早に自らが抱えた情報をミルファとそこにいる重臣達に告げた。
「帝軍が、動きました！」
「…！」
その言葉に、その場の空気は一気に緊張したものへと変わった。
いつ齎されてもおかしくはない知らせだと言うのに、ミルファも知らず手を握り締める。…人の目につかないよう、会議用の机の下で。
「セイリェンですか？」
出来るだけ平静さを保っているように気をつけながら、念の為に確認を取る。
セイリェンで帝軍が動くのはすでに予測されていた事だ。火急の用件だろうが、そこまで焦って報告する必要はない。
何処か落ち着きのない少年を落ち着かせる目的で問いかけた言葉に対し、伝令の少年の顔は見る間に動揺と困惑に満ちたものへと変化した。
それは傍で見ていてわかる程に劇的なもので、ミルファ以外の人間も何事かと思う有様だった。

少なくとも事実を私情を入れる事なく、正確に伝えなければならない伝令としてあるまじき態度だ。
「…いえ、違います」
そして彼は困惑を隠せない彼等の前で、心なし上擦った、あからさまに動揺を隠さない声でミルファの問いへ答えたのだった。
「違う……？」
予想外の否定する言葉に、ミルファも目を見開く。
「一体、何処で帝軍が動いたと言うのです」
自然と声が硬くなるのをミルファは自覚した。冷やりとした汗が背を流れる。
ここ数日の報告を思い返しても、セイリェン以外の場所で帝軍が動きを見せた事はない。
そもそも、皇帝は宣戦布告をせずにこちらに攻撃を仕掛ける事は今まで皆無だった。まるで正統性を主張するかのように、正面から自身の子の命を求める。
だからこそ、今までになかったそれは予想外の出来事だった。
ミルファの問いに、伝令の少年は続ける。
「ウルテです。ここより北東にあるウルテにて、帝軍と思われる武装集団による襲撃が確認されました」
「――　ウルテ、ですって……？」
一瞬、それが何処の事かわからなかった。そこが南領であろう事は確かだが、日常生活で耳にする地名ではない。
生まれた時から南領で暮らしている重臣達ですら同様らしく、小声で何処だと話し合っている。つまり明らかに要所ではないのだ。
ミルファはしばらく頭の中で細部まで叩き込んであった地図を辿り、ようやくその地名を思い出した。それ程にそれは、特にこれと言って特色のない小さな街だった。
強いて何かを挙げるとすれば――。
「…、まさか」
そこまで考えて、見る間にミルファの顔から血の気が引く。無意

識にぎゅっと手を握り締めた。
「セイリェンは、囮……！？」
思わず零れたその言葉に、そこに集まっていた重臣達はそれぞれに驚きを隠さない顔になった。
セイリェンとウルテでは戦略的価値に天と地ほどの差がある。片や貿易の中心、片や南領の辺境に位置する、特筆する特徴もない小さな街。比較する方が無理がある。
まさかと表情で物語る彼等に、まるで追い討ちをかけるように伝令の少年は、ミルファの言葉を肯定した。
「――　おそらく、そうであるかと」
それが誰の見識であるのか、それはもはやどうでも良い事だった。肯定された事で、ミルファの身体は震えた…恐れの為に。
「…襲撃があったのはいつ頃です」
「わかりません……。ウルテの街は現在壊滅状態に近く、状況だけで判断すると襲撃はおそらく早朝か夜間遅く、周囲に救援を求めるのも間に合わなかったのではないかと」
仮にもこの南領における反乱軍の頂点に立つ者だ。緊急を伝える知らせに対して、いちいち動揺するなどもっての他の事だろう。
だが、今回は誰もミルファを非難する事は出来ないに違いなかった。
何しろその場にいた人間は一人残らず、その言葉にミルファ以上の衝撃を受けていたのだから。
「…急いで伝令を走らせて、セイリェンに向かっている兵を半分戻しなさい！　…皇帝の狙いは南じゃない……！」
指示を飛ばしながら、ミルファはひどい咽喉の渇きを感じていた。うまく喋れない。嫌な予感ばかりが募る。
小さな…この南領の人間でも必要がなければ知らずに終わりそうな街・ウルテ。そこはこれといって特産物もなければ、交通の上の要所でもない。
けれど一つだけ何かを挙げるとするなら、そこが南領の主街道沿

いに存在する街だという事になるだろう。それも、末端に。
そこが襲われる理由を考えると一つしか思いつかない。
「どんな手段を使っても構わないから、すぐに東側との連絡を取りなさい！　南側から入る人間を何人たりとも侵入させてはならないと……！」
主街道――　すなわち、この南領から一直線に続く道。その道は、東の地へと続いている。
ウルテより先には小規模な村しかなく、そこが壊滅すれば情報網が断たれ、しばらく東側からの情報が途絶える事になる。
おそらく、その目的は時間稼ぎ。何の為にそんな事を行ったのかと考えれば、答えは自ずと出て来る。
東の地――　東領と呼ばれるその地には、現在あと二人しかいない皇帝の血を引く者がいるのだ。
ミルファにとっては、異母兄。数少ない肉親の一人。そして…父がその命を狙っている人物。
「兄上…皇子ソーロンの身が、危ないと……！！」
最後の言葉は、もはや悲鳴に近かった。

第一章　皇女ミルファ（4）

東領――　帝都より東側に位置するその場所は、他の地とは全く様相を異にする場所である。

領地の大部分が海に覆われ、大小さまざまな島が多数存在するそこは、産業的な面では遅れと取るものの、戦略的な面で見る限り、これ以上戦いにくい場所もない。

と言うのも、島と島の間を移動するには当然ながら船を使用するしかないのだが、その場を流れる海流は非常に気まぐれな上に複雑で、東領の民でも思うままに船を操れるようになるのに十年はかかると言われる程なのだ。

土地の利は明らかに東の地を知る者にあり、下手に攻撃しようものなら、逆に痛手を受けかけない。

同時にそのような場所であるが故に、各地で目撃される魔物の出現も格段に少なく、かつてはどちらかというと他よりも低く見られがちだったそこは、今では滅亡に瀕している北領や帝都などから人が流れて来るような有様となっていた。

余りの多さに、現在では双方共に出入りを厳しく制限している。特に帝都からはどんな小さな刀剣を所持していても立ち入りが禁止される程だった。

もちろん、それは皇帝からの侵略を警戒してのものなのは明らかだ。

何しろ、東領には現在、今は亡き東領妃が産んだ皇子がいる。名をソーロン＝トゥレフ＝ガロッドといい、現皇帝の第一皇子だ。

彼は皇帝乱心後、速やかに母の生地である東の地へ下り、一年後そこで挙兵した。

土地の利と、何より現在唯一生き残っている皇子という事もあり、同様に挙兵したミルファが周囲の理解を得るのに苦労したのと引き換え、兵を集める事も特に苦労せず、帝軍とも今までほぼ互角に渡

り合っている――　が。

＋　＋　＋

「…もう五年だ」

眼下に海を見下ろす東領主の館の一室で、彼――　ソーロンは忌々しげに呟いた。

父譲りの栗色の髪を乱暴にかき上げながら、どさり、と革張りの椅子に腰を下ろす。

「いい加減に痺れが切れてきたぞ。我が父上は、一体何を望んでいる？」

苛立ちを隠さない言葉に、部屋の隅で控えていた青年が仕方なさそうに答えた。

「…殿下のお命では？」

「そんな事はわかっている！　…問題は、私や妹の命を奪ってどうしようとしているのか、だ！」

「そんな事、皇帝陛下に直接聞かないとわかるはずないじゃないですか」

言葉はそれ以上となないものだったが、答えた青年の口調はおよそ真剣みというものが欠けている。

嫌な予感がしてソーロンがふと声の方を見ると、青年は自分の愛刀を今にも鼻歌交じりになりかねない様子で磨いていた。

仮にも主人に当たる人間を前に取る態度ではない。その無礼甚だしい態度にかっと頭に血が昇るのを覚えると同時に、ソーロンは怒鳴っていた。

「ルウェン！　貴様、それが剣の主を前にして取る態度かッ！？」

その怒りの声に対し、ルウェンと呼ばれた青年は一瞬目を丸くしたものの、やれやれと言わんばかりに肩を竦めた。

「だって仕方ないでしょう。殿下のそれ、今までに何度聞いたと思ってるんですか」

向けられた赤紫の瞳は、あからさまに呆れている。
その視線に更に頭に血が昇りかけたソーロンだったが、彼の言い分にも納得する部分もあった為に、ぐっと怒りを飲み込んだ。
自分でも最近、落ち着きがないと思う。あまりにも長く続く均衡状態に、精神が耐え切れなくなりつつあるのか。
ソーロンは小さくため息をつく事で怒りを散らすと、出来るだけ穏やかな口調を心がけて彼の信頼する部下に謝罪した。
「…済まない」
「イライラする気持ちもわかりますよ。私もいい加減、事態がもう少し動かないかと思ってますしね」
言いながら、すっかり磨きあがった剣を鞘に収める。
主人の前で剣を手入れするなど、本来ならあってしかるべき事ではない。普通なら主の許しがなければ剣は抜いてはならないはずだ。
けれどもソーロンはその事に関しては特に気にした様子もなく、彼がするように任せていた。
「腕を振るう場所がなくて、不満か？　『返り血のルウェン』？」
苦笑混じりに尋ねられ、ルウェンは軽く片眉を持ち上げる。
「とんでもない。この剣を振るう機会がない事はいい事ですとも」
だが、神妙に答える口調に対して、何処か不敵なものを感じさせる笑みはその言葉を裏切っていた。
やれやれ、と今度はソーロンが呆れる番だ。
『返り血のルウェン』――　その何処か血腥(ちなまぐ)い二つ名は、普段の彼を見るに相応しいもののようには思えないのだが、時としてその名が決して伊達や酔狂でつけられた訳ではないと感じる時がある。
飄々（ひょうひょう）とした言動の裏にある、好戦的な面が覗いた時、それなりに付き合いの長い彼も『こいつは敵に回したくない』と思う。
残虐性がある訳ではないし、戦場に立つと人が変わる、という訳でもない。
ただ――　感じるのだ。この男が、『戦う事を心の底から楽しん

でいる』事を。
人の命を奪う行為に対する罪悪感を知らないのではないか、そう思える程。見ていると命をかけた渡り合いなのに、まるで試合を勝ち進んでいるような錯覚を感じてしまう。
…おそらく、その感覚は危険なものだ。
なのに何故か、平和な時代に育ち、ろくに戦いの場を知るはずがないというのに、戦いを渇望するような様子を見せる彼に気付くと見入っている。
戦う為に生まれたように、生き生きと剣を振るう彼はそこにいるだけで士気を高めた。
そして――　彼が戦場に立った時、どんなに困難に思える局面でも必ず事態は好転するのだった。…彼の活躍によって。
元を正せば皇帝に士官していた身で、その乱心後に皇帝を見限って東の地へ流れて来たという身の上ながら、気がつくとルウェンという男は、東領にとっても、ソーロンにとっても、なくてはならない存在になっていた。
「…わからないと言えば」
「なんだ？」
「相変わらず、妹君はこちらからの手を突っぱねているんですか？」
ふと思いついたようなルウェンの質問に、ソーロンは苦虫を噛み潰したような顔になる。それは彼の苛立ちを募らせる要因の一つでもあったからだ。
「――　ミルファ、か」
現在生き残っている、二人の異母妹の一人。
母が違えば、自ずと顔を合わせる機会も少なくなる。その上に、彼とミルファでは年が十歳近く離れている。
直接会って話した事など年に数える程だったし、しかも最後に会ったのはミルファが十二の誕生日を迎えた宴の席だ。
五年後の姿など想像もつかないし、どういう少女なのかなど、当然わかるはずもない。

それでも最初の内は、生き延びた末の妹という事で、ソーロンは特に悪感情を抱かなかった。むしろ、逆に長兄である自分が庇護せねばと思ったくらいだ。

…が。

それは二年前までのこと。

何を思ったのかミルファは、十五の若さで父に対して挙兵した。それはソーロンの、ミルファに対する感情を塗り替えるのに十分な出来事だった。

「あれが何を考えているのか知りたいとも思わないが、状況というものをもう少し考えて欲しいものだ」

「兄である殿下を差し置いて、自ら立ち上がった事ですか」

「そうだ。下手に出てやれば調子に乗って…十七の小娘に何が出来る！？」

「何がって…でもお言葉ですが、殿下。この二年の妹君の評判はこの東の地にも聞こえて来るほどですよ？　少しは認めてやっても……」

「だからこそ、だ！」

拳を机に叩きつけての言葉に、ルウェンはおや、と目を見開く。

元々、ソーロンは感情で人の良し悪しを決めるきらいがあるが、ミルファに対するそれは、少々度が過ぎているように感じられた。

それは、ひょっとすると同族嫌悪のようなものかもしれないが、そういう感情はルウェンには理解出来ないものだった。

「あれはわかっておらんのだ。父を討つという事も、兵士の命を預かるその重さも。自分の身に降りかかった悲劇に酔っているだけだ。そんな者が皇位を望むなど…許される事ではない……！」

「……」

一方的に決め付ける言葉に、ルウェンは反論を口にしかけて、結局やめた。ここでそんな事を言えば、火に油を注ぐだけだろう。

ルウェンが聞いた限りでは、皇女ミルファはソーロンが言うような、勘違いも甚だしい人物のようには思えなかった。

第一皇子という立場に付け加えて、東領という地形的にも恵まれた場所に拠点を持つソーロンと比べ、ミルファは末の皇女という身分といい、大して大きくもない川を挟んで帝都と陸続きという悪条件を持つ。

にも関わらず、二年という短い期間の間に、徐々にだが力を増し続けているのは、偶然や強運で片付けられるものではなく――　むしろ逆に堅実さと根気強さ、そして人望の厚さを感じずにはいられない。

（…よく考えれば、あの皇帝の右腕とも言われた南領妃サーマの娘だ。政治的手腕も、このお坊ちゃんよりずっと上かもしれないな……）

かつては皇帝に仕えていた身だ。

四人いた皇妃の中でも南領妃を冠せられた人物が、長い歴史の上でどれ程に稀有な存在だったのか、聞くともなしに知っている。

（ま、直接見てみなきゃ、どんな女かわからねえけどな…って、今の所は会う予定すらないが）

心の中で一人ごちて、ルウェンは未だに不機嫌な顔をした剣の主に声をかけた。

「そろそろ軍議の時間のようですが？」

その言葉にちらりと卓上の時計に目を向けたソーロンは、はあ、と小さくため息をついた。

「…先に行け。少し頭を冷やしてから行く」

「了解しました。では、先に失礼いたします」

疲れたようなその言葉に、ルウェンは床に跪くと礼を取り、慇懃無礼にも取れる口調でそう言うと、ソーロンをその場に残して退出して行く。

その背が扉の向こうへ消えてしまうのを見届けながら、ソーロンはもう一度ため息をついた。

…自分でもわかっているのだ。ミルファに対して、何処か意固地になっている事を。

だが、庇護しようと伸ばした手を拒み、それどころか肩を並べようとする母親の違う妹の事を、どうしても認められない。
女だからと軽く見る訳ではないが、未来の皇帝として勉学だけでなく武術などにも励んだ日々を過ごした自分と、ただ母親や周囲の大人の愛情に包まれ、甘やかされて育ったであろう妹とでは、そもそも心構えが違うと思うのだ。
――しかし、ソーロンは失念していた。
ミルファが挙兵するまでの三年の時間の内、最初の一年は帝宮での生活とは正反対の、生きるか死ぬかの瀬戸際の生活を送っていたという事を。
その後の二年、ただ無為に日々を過ごしていた訳ではない事を――。

第一章　皇女ミルファ（5）

しばらく一人になり、頭も冷えてきた。
そろそろ軍議に顔を出さねば、とソーロンが座っていた椅子から腰を上げかけた、その時。
ふと、何かの気配を感じた気がして、特に深く考えずにそちらに目を向けたソーロンは、言葉もなく硬直した。
「……！？」
ぎょっと見開いた目の向けられた先――　窓辺に、一体いつの間に現れたのか、赤黒いローブをまとった人物が無言で立っていたのだ。驚くなという方が無理というものだろう。
すっぽりと全身を布で覆い、顔ばかりでなく体つきもわかりにくい。男か女かもわからないが、女にしては背が高いだろうか。
上から下までその姿を凝視し、ごくりと唾液を飲み込む。そこでようやく自分を取り戻したソーロンは、微かに上ずった声で誰何（すいか）した。
「…何者か」
「――　先触れもなくこのような参上にて申し訳ございません。私は…ザルーム。皇女ミルファ様に忠誠を誓う呪術師でございます」
まるで地面の奥底から響いてくるような、陰気な声が口上を述べ、恭しく（うやうや）礼を取る。
呪術師、と聞いてその得体の知れなさに多少の納得は出来たものの、それでも気味の悪さは拭い去れなかった。
「…ミルファの手の者が、何の用だ」
それでも自制心を最大限に発揮し、ソーロンは問いかけた。
つい先程、ミルファの事で激昂していた身としては、その声が幾分敵意のこもったものになるのは致し方ない事だろう。
ザルームはソーロンの言葉に気分を害した様子もなく（そもそも、表情が見えないので実際はわからないが）、ゆらりと身を起こして

姿勢を正すと、暗い声で用件を口にした。
「我が君より、言伝を承って参りました」
「言伝……？」
その言葉に、ソーロンは首を傾げた。
通常、何か伝える事があるなら鳩を飛ばしたり、人を走らせるのが普通だ。それをわざわざ単身、しかも先触れもなく訪れるなぞ、本来ならあって然るべき事ではない。
その疑問が伝わったのか、ザルームは軽く頷いた。
「はい。間に人を置くのも、鳩を飛ばすのも惜しむほど、火急の用件でございます」
南領の都から東領に至るまでに、足と体力に自信があるものが、交代で朝も夜も駆け続けても半月はかかる。
そこから海路でこの東の都・アーダまで更に十日はかかる。効率の面で言えば、確かに得策とは言えまい。
だが、鳩を飛ばせば数日と時を縮める事が出来るのに、その数日を惜しむとは――　果たして一体何事が起きたと言うのか。
眉間に皺を刻みながら、ソーロンは再び椅子に腰を下ろし、聞く体勢を取った。
「…申してみよ」
「――　先日、南領の東へ向かう主街道沿いの街であるウルテが、帝軍と思われる武装集団に襲撃を受けました」
「…？　それがどうした」
「お恐れながら、東の地は地形的に有利でありますが、同時に潜伏場所にも事欠かない場所。…北と西の壁は厚いものの、南に対してはその限りではございません。身辺にお気をつけなさいませ。狂帝は、南の地を介してこの東へと刺客を送り込んだ可能性がございます」
「……」
ぼそぼそと語られる言葉は、聞いているだけで背筋に冷たいものを感じさせた。

絶えず人が流れて来る北と、西――　帝都側は、人の出入りを厳しく監視しているものの、南からは行商人程度しか来る者がいない為、確かにその規制は緩かった。
無意識に南側からの進入はないと思っていたのは、ソーロンだけではないだろう。
南にはミルファが率いる反乱軍が控え、一歩も譲らない攻防を展開している。心では認めていないものの、南に対する警戒が薄くなっていたのは事実だ。
もし、このザルームと名乗る不気味な呪術師の言葉が真実なら、すでに東の地に皇帝からの刺客が入り込んでいる可能性がある。そうなると、時間との勝負だ。
（――　だからミルファは、この呪術師を送ったのか）
…自然と表情が引き締まる。やがてソーロンは、窓辺に控えるザルームに礼を述べた。
「報告、感謝する」
しかしそこで言葉を切り、ソーロンは冷ややかな目を向けると、だが、と言葉を繋げた。
「…ミルファにそなた程の呪術師がついているなど、聞いた事がない。私も詳しくは知らないが、空間を渡るような能力は滅多に現れない特殊なものだと聞く。それだけの能力を持ちながら…今まで、名も聞かぬとはおかしな話ではないか？」
言うと同時に、椅子を蹴り飛ばすようにして立ち上がると、側に置いていた剣を掴み、鞘から一息に抜く。
そのまま剣の切っ先をザルームに向け、友好的なものなど欠片もない口調で言い放った。
「そなたが、皇帝…父の刺客ではないと、何をもって証明する？」
「――　信じてはいただけませんか」
「残念ながら、な。何より、ミルファがこちらを気遣う理由もない。疑うなという方が無理ではないか？」
ソーロンの言葉に、何か感じる所があったのだろう。ザルームは

僅かに言葉を躊躇(ためら)った。
「…我が君は、殿下を血の繋がった肉親と思っていらっしゃいます」
「そうか？　では…どうして何の相談もなしに挙兵した。兄と思っているのなら、こちらの言葉に耳を傾けるのが普通ではないか？」
「それは……」
ザルームが言い淀んだ事で、ソーロンは益々自分の正しさを確信した。
これは、おそらく罠なのだ。
もしこの言葉を信じ、南への警戒を強めれば、自ずと北と西への手が薄くなる。兵士の数は多いとは言え、三方向全てに気を配るのは至難の業だ。
――謀(はかりごと)であると判断しても、不思議な事ではないだろう。
ソーロンの認識を覆す事は無理だと判断したのだろうか、ザルームは沈黙したまま、自分に向けられた刃を前に無防備に立っている。
このまま切りつけられて構わないかのような、隙だらけのその様子にソーロンも行動を起こせずにいた。
真っ当に育てられ、正義感の強い彼には、無抵抗な者を怪しいからと言って一方的に切りつける事は躊躇われたのだ。
…重苦しい、緊張した空気が生まれた。
刃を下ろす事も出来ず、次の行動を思いあぐねていたその時、このまま膠着(こうちゃく)化するかに見えた事態は急転した。
「殿下、まだそこにいるんですか？」
「！」
不意にノックと共に聞こえてきた呑気な声に、ソーロンは反射的に扉に目を向けていた。
「全員揃ってるんで、そろそろ来て欲しいんですがね。…殿下？」
そこで扉の向こうにいる人物――　ルウェンも部屋の中にある張り詰めた空気に気付いたのか、言葉尻が僅かに疑問の形を取った。
そして次の瞬間、遠慮なく扉が乱暴に開かれるや否や、早くも剣を抜いたルウェンが飛び込んでくる。

「…何者！？」
「待て、ルウェン！！」
反射的にソーロンが制止の声を上げるが、ルウェンが立ち尽くすザルームに肉薄するのを止めるには及ばない。
それ程に身柄を取り押さえようとするルウェンの動きは正に電光石火の早さだったが、対するザルームはそれよりも一枚上手だった。
「…、メイ・プロス・テス……」
その顔を隠すフードの奥から、不可思議な響きの言葉が紡がれるのと、ルウェンの切っ先が伸びるのは同時だった。

…キン……！

「ぐわっ！？」
まるで金属がぶつかり合うような硬質な音が微かに聞こえたかと思うと、次の瞬間、ザルームに触れる事なく弾き飛ばされたルウェンの姿があった。
流石に不様に倒れる事はなかったものの、体勢を崩して剣を取り落とす。
「…呪術師……！？」
まるで予想してなかった展開に、ルウェンも驚愕を隠せない顔になる。そんな彼等の前で、ザルームは相変わらず暗く響く声で暇（いとま）を告げた。
「…信じていただけなくて残念ですが…我が君の言葉は、確かにお伝えしました。私はこれで去ると致しましょう」
「ま、待て……！　逃げるか！？」
慌てて引きとめようとするソーロンに、フード越しに一瞥を与えると、ザルームは軽く頭を下げ、略式の礼を取る。
「…どうぞ、くれぐれもご身辺にお気をつけあそばされるよう……」
「ルウェン、逃がすな！　取り押さえろ！」
「…んな事言われても！」

ソーロンの無茶な命令に、ルウェンが悲鳴じみた声をあげる。
「呪術師相手に、下手な攻撃が出来ると思ってんのか、あんたは！！」
もはや敬意も何もあったものではない口調で怒鳴り返しながら、それでもすかさず取り落とした剣を拾い上げた彼は、ある意味立派だった。
何しろ、ルウェンはザルームが現れた場面を見ていない。どのような手合いかもわからない上に、先程の術の展開の速さ。
東領の反乱軍の中にも呪術師はそれなりにいるが、一瞬にして防御壁を張るような事が出来る者が果たしてどれほどいる事か。
下手に攻撃して、反撃されては敵わない。剣と違って、呪術師の術は攻撃を予測する事も回避するのも難しいのだから。
警戒を強めながらも剣を手に身構えたルウェンだったが、ザルームはそんな彼へも略式の礼を取って彼の意表を突いた。
「…あ？」
理由がわからず間抜けな声を上げる彼に、陰気な声は言った。
「貴方が『返り血のルウェン』ですか。その異称は南の地にも届いてきております。…本日はこれで失礼しますが……」
「？」
「…またお会いするような事があれば、このような物騒なやり取りはなしでお願いしたいものです」
僅かに苦笑の滲んだ声が紡がれたと思うと、ザルームの身体が透けて行く。
「な……！？」
ぎょっと目を見張るルウェンのソーロンの目前で、ザルームは静かにその姿を消していた。

第一章　皇女ミルファ（6）

「……」
「……」
ザルームが姿を消した後、ソーロンとルウェンは無言で立ち尽くしていた。
それだけ、ザルームの消滅は彼等にとって衝撃的なものだったのだ。何しろ――　普通なら、人が跡形もなく消えるなどあり得ない事だ。
「…何だったんだ……？」
やがて沈黙を破ったのはルウェンだった。まだ手に持ったままだった抜き身の剣を鞘に収めながら、ぼそりと呟く。
ザルームとソーロンのやり取りを知らない彼にしてみれば、一体あの呪術師が何をする為に来たのかと疑問を感じるのも当然の事だろう。
その理由を知るソーロンだったが、まだザルームへの疑惑から抜け出せずにいた。皇帝の刺客ではないと言っていたが、本当にそうなのかと。
真実、ミルファに仕えているのだとしても、あれだけの使い手をミルファが隠す理由を思いつけなかった為だ。
強大な力を持つ呪術師の存在は、それだけで一騎当千の価値がある。もしそれが判明すれば、皇帝側もその存在を恐れておいそれとは仕掛けられないだろうし、自軍内の士気も上がるに違いない。
もし自分なら公表するだろう。いざという時の為に隠すにしても、いつ訪れるかわからない有事の際まで温存するなど、宝の持ち腐れのようにしか思えない。
だが…同時に思うのだった。
もし、ザルームが皇帝の刺客ならば、自分が気付くよりも先にこの命を奪い去れたのではないかと――。

そんな物思いに耽る主人をちらりと見やって、ルウェンはため息をつく。この様子では自分の疑問には答えてくれそうにない。おそらくソーロン自身、納得する答えがないのだろう。
ルウェンは普段の口調に戻ると、考え込むソーロンに声をかけた。
「殿下？」
「…？」
まだ難しい顔をしたまま、何事かと目をあげるソーロンへ、ルウェンは疲れた声で提案した。
「取り合えず、軍議に行きませんか。流石に他の連中が痺れを切らしている頃ですよ」

＋　＋　＋

何もないはずの空間が僅かに揺らぐ。
感覚的に待ち人の帰還を察知し、窓辺にもたれていたミルファは姿勢を正した。
北向きのこの部屋は、常に薄暗い。夏も近い今の季節、南領は何処よりも光の恩恵が溢れているが、窓辺から差し込む光は南向きのそれより幾分弱く、部屋の奥までは届ききっていない。
寝室ならばさておき、私室として使用するには不向きなその部屋を、好き好んで使用している物好きは、やがてミルファの視線を向ける先、部屋の中央にその姿を現した。
特徴的な赤黒いローブ。曖昧だった輪郭は、すぐに明確ではっきりとした質感を持つものへと変わる。
その光景はすでに何度も目撃しているが、幾度見てもやはり不思議としか言いようのない光景だった。
「…ミルファ様」
現れると同時に彼女の存在に気付いていたのか、僅かに驚きを含んだ声が表情の見えない布の向こうから聞こえてきた。
「何故、このような所に。こちらから出向きましたものを」

「気にするな。お前の帰りを待った方が早いと思ったまでのこと」
言いながら窓辺を離れ、未だ自分よりも幾分身長のある彼の元へ歩み寄る。すぐ目の前で立ち止まると、憚(はばか)るように声を抑えて問いかけた。
「――　ウルテの襲撃を察知し、伝令に報告させたのはお前だろう？　ザルーム」
「…お気付きでしたか」
暗い声音に苦笑が混じる。予想通りの返事に、自然とミルファの口元にも笑みが浮かんだ。
「たまたま、あちらの方へ《目》を飛ばしておりましたので……。差し出がましいかと思いましたが」
「いや。もし、知るのが数日遅れていたら…恐らくその意図にも気付けず、囮とも知らずにセイリェンの守りばかりに気を囚われて事だろう。…よくやってくれた」
「当然の事をしたまでです、我が君」
ミルファの労(ねぎら)いの言葉に、ザルームは緩く頭を振り、そのまま跪(ひざまず)くと、つい先程東領へ赴いた際の出来事を報告した。
「…どのような手段を講じても、東と繋ぎを取れという事でしたので…勝手ながら、先程ソーロン様の元へ行って参りました」
許可なく申し訳ございません、と続いたザルームの言葉にミルファはその表情を改めた。
「その件に関しては気にしなくても良い。姿が見えなかったから、そうだろうと思っていた。…それで、兄上は何と？」
「それが――」
ザルームの口から紡がれたそこでのやり取りを聞き終えると、ミルファは小さくため息をついた。
元から期待はしてなかったが、よもやそこまで兄が自分に対して良い感情を抱いていないとは思わなかった。
「…耳を貸さないばかりか、逆に疑われたか。…済まない、ザルーム。無駄に力を使わせた」

「いいえ…こちらこそ、お役に立てず申し訳ございません」
「気にしなくてもいい…おそらく、鳩を飛ばして知らせたとしても、結果は同じだっただろう。未だに兄上は、私が挙兵した事を快く思ってはいないのだな……」
ミルファ自身も、わかってはいるつもりだった。
挙兵する際に何の相談もしなかった事が、庇護の手まで差し伸べてくれていたあの誇り高い兄にとっては裏切りにも等しい衝撃を与えたであろう事は。
もちろん、そうしたのはそれなりに理由と思惑があっての事だし、今更何を言っても言い訳にしかならない事もわかっている。生意気だと思われたとしても致し方ないと思う。
けれど――　こちらにも、引くに引けない理由はあるのだ。
「…正直に言わせて貰えば、私は皇位など欲しいとは思っていないし、皇帝にふさわしいのは兄上だとも思っている。それだけの努力を今までされてきた方だし、何より誠意のある方だ。きっとよく世界を治めて下さるだろう。…でも、これだけは譲れない」
決意を秘めた宝玉の瞳は、そのまま背後の窓に向けられた。北の空――　その下にいる、父に思いを馳せる。
「兄に任せてしまっては、おそらく二度と生きた父に会う事はないだろう。責任感が強く真面目な兄の事だ、一度庇護すると決められたなら、おそらく私に表に出る事も剣を握る事もさせず、全てが終わるまで箱の中に閉じ込めてしまわれる。…それでは、駄目なのだ」
兄の手を取るという事は、ミルファにとっては自身の自由を捨てると同義。だからこそ、ミルファは兄の不興を買うのを覚悟で挙兵した。
…自分の自由と、意志を守る為に。
（私はお父様に直接会って、尋ねたい事と話さなければならない事がある。この私の口から……）
それがどんなに困難な事かは承知の上だ。
「…ザルーム、私は間違っているだろうか……？」

やがてぽつりと力なく問われた言葉に、姿勢を正したザルームは、静かに今までに何度も口にした言葉を繰り返した。
「迷わずに、お進みなさいませ」
「ザルーム」
再び彼に目を戻したミルファの表情は、他の誰にも見せない、十七歳の少女のものだった。
進むと決めながらも迷わずにはいられない、そんな不安と重圧に必死に抗う少女の顔。…おそらく、その事にミルファ自身は気付いていない。
誰にも心を許さず、気高く、強くあらねばと努力するその姿が、どんなにそれを見守る者にとって痛々しく見えるか、きっと知らない。
もし知ったなら、恐らく自己嫌悪に陥る(おちい)事だろう。
だからこそ、ザルームはそんな彼女をあからさまに励ます事は決して口にせず、ただ繰り返すばかりだ。
そんな事をすれば、聡い彼女が自身の弱さに気付いてしまいかねないから――。
「貴方様が己の意志で選んだ道を、お進みなされば良いのです。御自身が信じた道ならば、それが貴方様にとって正しいものとなるはず。…私はその道が出来るだけ平らかなものとなるよう、ご助力いたします」
「……」
今まで弱音を吐く度に、何度も耳にしたザルームの言葉。それはたとえミルファが間違った道に進んでも、仕え続けると言っているようなもの。
ミルファは思いつめていた表情をふと緩め、苦笑混じりに呟いた。
「…お前は、私に甘過ぎる」
するとザルームは生真面目な口調で珍しく言い返した。
「ミルファ様が御自身に厳し過ぎるのですよ」
声音と言えばやはり陰鬱で、聞いていて心が浮き立つはずもない

のに、不思議と心が軽くなる。
それはそれだけ、ミルファが彼に心を許している証でもあったが、やはりその自覚はミルファになかった。
無自覚のまま、ミルファは祈るような気持ちで言葉を紡ぐ。
「…願わくば、このまま何も起こらずにいてくれるといいのだけれど……」
ウルテを襲い、おそらくすでに東領に入ったであろう一団が、一体何を目的としているのかは不明なままだ。
それでも帝軍である可能性が高い以上、恐らく何か仕掛けてくるだろう。東の地か――　あるいは、それも見せ掛けでやはりこの南の地にか。
今は相手の動きを待つより他はなく、この心配が杞憂（きゆう）に終われば と祈るばかりだ。
面識もろくになく、今となっては悪感情をも持たれてしまっているようだが、血の繋がった兄なのだ。もうこれ以上、近しい人を失いたくはなかった。
今は誤解があったとしても、いつかは和解したいと思う気持ちに嘘はない。
いつか――　全てが終わった、その時に。そしてきっと、それは不可能な夢ではないはずだった。
手を取り合う事はなくとも、ソーロンもミルファも願う事は一つ。世界が再び、平穏を取り戻す事なのだから。

――　しかし、それから何事もなく十日が過ぎ去った後。
ミルファの祈りは、これ以上とない最悪の形で打ち砕かれる事となる。

第一章　皇女ミルファ（7）

後世、その変事は《東領の変》として、《皇帝乱心》と共に歴史に刻まれる出来事となる。
それ程に、それは世界の常識を覆す出来事だったと言えよう。
その時の事を実際に目にした者は、皆、当時の事を尋ねられてはこう繰り返した。

今後、どれ程恐ろしい目に遭おうと、きっとあの日以上の恐怖を味わう事はないだろう。出来れば二度と、思い出したくもない記憶だ……。

…――　と。

＋　＋　＋

「て…敵襲だあああッ！！！」

その叫びが上がったのは、まだあらゆる生き物が眠りの中にある夜明け前のこと。夜と朝の狭間――　その闇と静寂を切り裂くように、見張り兵の声は響き渡った。
不意討ちではなかった。
何しろ、『敵』は堂々と正門の前に姿を現し、その腕で固く閉ざされた門扉を叩いたのだから。
…ただし、叩かれた城門が叩かれると同時に木っ端微塵に砕けた事だけが常と異なっていただけで。
正面から進入した『敵』は、そのまま中へと進入し、やがて彼等の侵入に気付いて駆けてくる警備兵達を見つけると、その瞳に喜悦の光を浮かべた。

「一体何事…う、うわあああああッ！？」
警備兵達は目の当たりにした常軌を逸した訪問者その姿に、己の目を疑った。
「ま、魔物……ッ！？」
「ばかなっ、何故こんな所にこいつらが――！」
侵入者――　それは、この東領ではほとんど出現が確認されていなかった『魔物』と呼ばれる異形の生き物達だったのだ。
現在、滅亡の一途を辿りつつある北領では頻繁に目撃されているが、それでも彼等（と表現するには、いささか獣に似過ぎているが）が複数で姿を見せる事はないとされていた。
…なのに。
「…神よ……！」
その場にいたのは、姿も形も大小さまざまの、魔物の集団だった。
軽く見積もっても十体はいるだろうか。招かざる客は、ゆったりとした足取りで中へと進んで来る。その目に宿るは狂気――　狂喜。
舌なめずりをせんばかりに、それはらんらんと滑りを帯びた輝きを放っていた。
これから起こる、血の惨劇を思い描いてか――。
その進入を阻もうと、彼等はそれぞれの得物を手に取ったが、気の毒なくらいに持ち上げたそれは手元から震えていた。
「だ、誰でもいい…報告に走れ！」
カタカタと震えながらも、その中でも年嵩の男がそう口にした。
この館の守りを任された責任が彼にそう言わせたのだろうか。その言葉に、その場にいた彼以外の人間はそれぞれ顔を合わせ――しかし、結局、誰一人動く事は出来なかった。
思いがけなかった事実を知った驚愕と、それが意味する恐怖とで、足が完全に竦(すく)んでいた為だ。
「何をしている…早く……！」
男が急かした。
魔物達はもう、彼等から数十歩の所にまで迫っている。

（駄目だ……）
彼等の脳裏に浮かんだのは、そんな諦めを含んだ言葉だった。
今、もし下手に動いたら、目の前にいるこの魔物達は一気に襲い掛かってくるだろう。
逃げれば追う、それが獣の本性だ。その場合、追う側は逃げる側より圧倒的な力を持っている事が常。
…そして魔物は、一体だけでも彼等が全員で束になって勝てるかどうか怪しい程に強大な力を持っている。
結局、彼等はその場に立ち尽くしたまま、じわりじわりと迫り来る恐怖と向き合う事しか出来なかった。
――　やがて。
恐怖が頂点に達した誰かが手にした剣を取り落とした、澄んだ金属音が響き――　時を置かず、夜の闇に複数の人間の断末魔の叫びが響き渡る。
…それが、これから起こる狂乱の始まりの合図だった。

＋　＋　＋

正門での惨劇を皮切りに、本来ならば静寂の中にある時分ながら、一瞬にして東の地を預かる領主の館は昼間以上の喧騒（けんそう）に包まれた。
「通路を塞げッ！　これ以上、進入を許すなーっ！！」
怒声、悲鳴――　それに混じって飛ぶ、命令の声。
人々は忙しく立ち動くが、誰もがその顔に隠し切れない恐怖を浮かべていた。
東の都アーダは、東領でも最も東に位置する島に置かれている。
当然ながら、そこに至るまでには何度も船を乗り継がねばならず、その都度、厳しい審査を受けて身元を証明せねばならない。
身元に少しでも不透明な部分がある者は、その場で捕縛され、何

らかの処分を受ける事になっており、故に彼等が心の底でこの地で滅多な事が起こるはずがないと思ったとしても、罪ではなかっただろう。
何しろ、相手が『人間』ならば、確かにそれは思い違いではなかったのだから。

「報告いたします！」

乱暴に扉を開くと同時に、転がるような勢いで伝令が駆け込んでくる。
そして荒れた呼吸を整える暇も惜しみ、そのまま口を開いた。
「敵は…、正門突破後、現在中央棟にて、足止めを…受けております！　ですが、すでに十数名の…戦闘不能者が出ており…っ、突破されるのも、時間の問題、かと……！」
肩を上下させ、喘ぐように報じられた知らせに、その場にいた人間の顔は一様に曇った。
その中心にいたソーロンが、今まで全力で駆けてきたと思しき伝令に労いの言葉をかけようとした時、再び扉が乱暴に開かれ、違う伝令が飛び込んで来た。
「大変です……！　先程、北の門と西の門からも敵の侵入が確認されました！」
「…何だと……！？」
その報告に最初に反応したのは、その場にいた警備隊長だった。
普段は人好きのする笑顔を浮かべ、滅多な事では動揺を見せない彼が、蒼白の顔でうめき声を上げる。
「まさか…囲まれていると言うのか……！？」
「――　隊長」
そのまま頭を抱え込む警備隊長に、すぐ横にいたルウェンが労わるような声をかける。
「少し、落ち着かれた方がいい」

「落ち着け！？　ルウェン殿、貴公はこの事態を前に落ち着けると思っているのか！？」
弾かれたように顔を上げると、警備隊長は声を荒げて詰め寄る。その目は充血し、恐怖と混乱とに支配されているのは明らかだった。
「魔物が、襲ってきたのだぞ！？　しかも…集団でだ！　魔物が今までに集団で…しかも組織的に襲撃するなど、聞いた事もない！そんな異常事態で、どうして落ち着けると言うのだ！！」
前代未聞の出来事を前に、取り乱すなという方が無理と言うものだろう。それはルウェンとて理解している。だが、上に立つ人間が揺らげば必然的にそれに従う者に影響が出てしまう。
「…それはそうですがね。だからって、驚き慌てたって、事態は何も変わらないでしょうが」
今にも掴みかからんばかりの警備隊長に、ルウェンは疲れたようにため息をついた。
その顔はと言えば、やはり緊張を隠せない。
彼とて、複数の魔物と対峙（たいじ）した事など一度もなく、過去に数度単体で目撃した事がある程度だ。…しかも、息絶え、もう動かなくなった状態の。
そもそも、魔物と呼ばれる存在は、遥か昔にその姿を消したと言われていた存在だった。
神話や地方に伝わる伝承にその名が残るほどで、実際にその姿が確認されたのは《皇帝乱心》後のこと。
人よりも獣に近い異形の姿。それぞれに異なる姿を持つ為に、代表的な姿を挙げよといわれても難しい。
全身が硬い毛で覆われたものもいれば、鱗のようなもので覆われたものもいる。
目が一つしかないものもいれば、五つもあったものもいる。中には腕すらも二本以上あるものもいたらしい。
外見的には単に『異形』としか表現するより他はない。だが、それらには一つだけ共通点が存在した。

特徴とも呼べない事だったが、それ以上にそれを表している特徴もない。
それは――　人間が数人束になっても倒すのが困難な程の高い戦闘能力と、切り裂いた先からすぐに傷が治って行く、信じがたい程の回復力を有するということ。
弱点という弱点はなく、倒すには首を落とすか、心臓を抉(えぐ)り取るしかない。そうでもしなければ、たとえ心臓を突いても、すぐに再生してしまうからだ。
…それでも、今まで何とか対抗してこれたのは、今まで魔物が単体でしか現れていなかった事と、知能が獣並みしかなかった為。
力押しで来る一体に対し、相応の準備をした集団で当たれば何とかなる――　それが今までの魔物における『常識』だったのだ。
だが、今回の襲撃はそれまでの認識を全て裏切るものだった。
複数での出現、組織的な行動――　まるで、今までが彼等の油断を誘う為にわざとそうしていたのではないかと思えるほど。
「…殿下、どうなされますか？」
思いがけない事態に、ルウェンからも普段の飄々とした雰囲気は消えていた。周囲が動揺を隠せない中、殊更冷静になろうとしているのか、声も硬い。
その采配を問う声に、彼の剣の主は考え込むような表情で視線を上げた。ソーロンの動きに、その場にいた全ての人間の目が集まる。
その顔は緊張の為か、それとも恐怖の為か、明らかに青褪めていた。だが――　まだ何一つ、諦めてはいない顔だった。
その表情に、知らず人々は見入っていた。言葉もなく。
…やがてソーロンは、意を決したようにゆっくりと口を開いた。

第一章　皇女ミルファ（8）

「――　火を使え。許可する」

その言葉に、周囲の人々は驚きを隠せずにどよめきを漏らす。だがその中で一人、ルウェンだけは驚いた様子も見せず、逆に感心したような顔を見せた。

「…いいんですか、殿下？　そうすれば、ここも無傷では――」

「構わん。…館は、また建てられる。だが…人の命に二度はない。そうだろう、ルウェン？」

それはおそらく一か八かの勝負だった。

うまく行けば魔物を何とか撃退する事が出来るかもしれないが、最悪の場合――　何も残らない。

（ここで食い止められなければ、次は周辺の街を襲うかもしれない。ろくな攻撃手段のない一般の民に、不特定多数の魔物を向かわせる訳には行かない――！）

長年の為政者となるべく施されてきた教育が、ソーロンに結論を齎（もたら）した。兵を、民を守ること、それが第一だと。

「今は魔物をどうにかするのが先だ。火で焼けば、奴等の再生能力も少しは下がるはず…時間はかかるが、一体ずつ確実に仕留めろ。…――　こうなったら持久戦だ」

「…御意」

ソーロンの決意を秘めた言葉に満足そうに頷くと、ルウェンはまだその場にいた伝令二人にすぐさまそれを伝えるよう指示する。

伝令が退出の礼もそこそこに駆け去ると同時に、再びソーロンに向き直るとその顔にようやく普段の笑みを浮かべた。

＞i267531458＜

「…何だ？」
その笑顔の意味がわからず、訝(いぶか)しげに眉を寄せるソーロンに、ルウェンは笑顔のまま言い放った。
「いやあ、あんたに剣を預けて正解だったなと思って？」
打ち解けすぎる口調に、その場にいた誰もがぎょっと目を剥いて絶句した。時と場合によっては、不敬罪に問われる言い草だっただろう。
だが、それを受けたソーロンは怒りもしないばかりか、全く気にした様子も見せずにふん、と鼻先でばかにしたように笑うだけだった。
「お前に言われても、全然嬉しくない言葉だ」
「…あっそ」
剣を預けた主のつれない言い草に拗ねたように唇を曲げると、ルウェンは気を取り直したようにその場に跪き、腰に佩(は)いた剣を鞘ごと外してソーロンに差し出した。
…それは騎士が主と認めた者に行う、剣を預ける儀式。かつて、ソーロンとルウェンの間で一度は交わした主従の儀式だ。
それを何故、またやろうとしているのか。
その意図がわからずに剣を受け取ろうとしないソーロンに、ルウェンは生真面目な口調で口上を述べ始めた。
「――　我が剣は我が命と同一のものにして、血潮の一滴すらも主の為に捧げるものなり」
「ルウェン？　何の真似だ」
「…うるせェな、最後まで黙って聞きやがれ。――　我が主の命なれば、その太刀となり、その盾となり、その鎧とならん。我が名、ルウェン＝アイル＝バルザークの名において、この忠誠は我が命が絶えるまで永遠のものと誓約す」
そこまで言うと、ソーロンもたじろぐ眼光で剣を受け取るように訴える。
周囲の人々も唖然として見守る中、ソーロンは渋々捧げられた剣

を受け取り、そしてまた視線で訴えられて、仕方なしに口を開いた。
「…許す。我が名、ソーロン＝トゥレフ＝ガロッドの名において、汝を我が剣と認め、その命を預かる事をここに誓約せん」
そしてため息。この非常時になんの茶番だと思っていると、ルウェンはソーロンの予想を覆す言葉を口にしたのだった。
「…ではこの剣にお命じ下さい、我が主よ」
「――　命？」
見れば、ルウェンの顔が再び真剣なものに変わっている。
困惑を隠せないソーロンに、何処か慇懃無礼な――　ルウェンがソーロンの立場を認識させる時にわざと使う口調で更に続けた。
「たった今、殿下は私の命を預かると誓約なさったでしょう。…我が剣は飾り物ではございませんが？」
「……！？」
言わんとする所に気づき、ソーロンはぎょっと目を見開いた。
「――　お前は私に、『私の為に死ね』と命じろと言うのか」
やがてその血の気の失せた唇から、呻くような言葉が零れ落ちると、ルウェンはしたり、とばかりに不敵に笑んだ。
「それでもいいですが。…一応、これでも騎士なもんで。剣の主を一人放り出して、戦いに行く訳には行きませんからね。取り合えず、剣の主がどういうものかをもう一度思い出していただいた訳ですが」
「……」
重苦しい空気が生まれた。
遠くから響く声や剣戟の音が現実を知らせる以外は、まるで時でも止まったようにその場は沈黙が支配していた。
押し黙ったソーロンの返答を、飄々とした笑顔のルウェンが待つ。
悩む余地などない事は明らかだった。今は一人でも多く、対抗する手段が欲しい。それこそ、咽喉から手が出る程に。
けれども…ソーロンはすぐに答える事は出来なかった。
ルウェンは己の騎士であるだけでなく――　認めるのは癪だが、今まで身近にいた事のない、友人のようなものに近い存在だと思っ

ていたからこそ。
相手が人間ならば何の迷いもなく命じられた。そうしても、ルウェンが生きて戻ってくるという根拠のない自信がいつの間にかあったからだ。だが、今回は相手が魔物――　下手をすれば、もう、二度と。
――　それでも先に沈黙を破ったのは、ソーロンだった。
「…わかった、行け。ただし――　私に剣を預けた以上、簡単に死ぬ事は許さないからな」
疲れたように呟いて、手にしたルウェンの愛刀を差し出す。
立ち上がると同時にそれを受け取り、ルウェンは当然だとばかりに片眉を持ち上げた。
「当たり前でしょう。私を誰だと思ってるんですか」
それは自信に満ちた言葉のように聞こえたが、それが己を鼓舞する為の虚勢である事をソーロンは見抜いている。
だが、ここは敢えて気付かない振りをして、彼もまた笑みを浮かべた。
「ふん…『返り血のルウェン』の名、伊達ではない所を見せてもらおう」

＋　＋　＋

遠く、遥か地上から風が血の匂いを運ぶ。それは周囲の潮風に似て、けれど全く異なる匂い。
夜明けが近付き、東の海の果ては僅かに明るくなりつつあった。
もっとも東に位置するその場所は、世界で最初に太陽の目覚めを目の当たりにする。その時は、近い。
近付く夜明けを感じながら、風の只中にいたそれは、くすりと笑いを漏らした。
闇に溶け込むその姿は、まだかろうじて空に存在する月によってわずかに輪郭だけが見て取れる。

それは大きさと形から判断すると、人のようだった。
風を受けてはためく布。全身をすっぽりと黒っぽい布で覆ったそれは、いかなる術によってか空中に立ち、上空から闇に沈んだ地上を見下ろしていた。
「…踊れ、我が手の上で」
布の奥から、くぐもった言葉が紡ぎ出される。それはあからさまな嘲笑が込められていた。
「せいぜい抗(あらが)うがいい…どうせ、逃げられはしないのだから……」
聞く者は誰もなく、その呟きはただ風に浚(さら)われて消えるばかり。
やがて地上に見える館から、赤い火の手が上がった。それはその周囲を吹き荒れる海風によって、たちまち広がり、館を包み込んでゆく。
闇に浮かぶ、赤い炎。それはまるで、大地の流す血のようだった。
そして――　その炎の元では、実際に多くの血が流れている事をそれは知っていた。
ゆらり、とその腕が持ち上がり、まとわりつく布がさながら翼のようにばさり、と音を立てる。
「さて、そろそろ仕上げと行くか……」
呟くと同時に、その指がパチリと軽く鳴る。その瞬間、ここからではわからないが、地上で更なる混沌の種が芽吹いた事をそれは感じ取る。
やがてそれは程なく育ち、抗おうとするものに恐怖と絶望を与える事だろう。
くすくす、と堪えきれないように零れ落ちる嘲笑。肩を揺らし、やがてそれは哄笑へと変わる。
「…くっ、はははははは……！」
愉快で堪(たま)らない――　言葉以上に雄弁に物語るその笑い声は、笑い声だというのに何処か呪詛のような印象を与えた。
否、実際にそれは何かを呪っていたのかもしれない。その目は地上を離れ、今にも大地の果てに消えようとする月へと向かう。

「狂え…狂うがいい、天秤よ。そして、全てを無へと還すがいい――」

そんな呟きが零れ落ちたかと思うと、もうそこに人影の姿はなかった――。

第一章　皇女ミルファ（8）（後書き）

１１０７０４／挿絵追加

第一章　皇女ミルファ（9）

進むにつれて、漂う空気は次第に潮を想わせる濃い血の匂いが増していく。

その事に気付き、僅かに顔を顰(しか)めながら、ルウェンは通路を疾走していた。

時折、人の叫び声や魔物のものと思しき咆哮(ほうこう)が聞こえる。緊迫した空気は、今まで何度となく味わった戦場のそれとは全く違っていた。

――心が、浮き立たない。

戦いの最中に身を置く事は、己にとって何よりの喜びであったはずなのに――。心の内で舌打ちし、それでも彼は走る足を止めなかった。

（嫌な兆候だな、これは――）

相手が魔物だからか、それともまた別に要因があるのか。ルウェンは纏(まと)わりつく不吉さを追い払う事が出来ずにいた。

場の雰囲気が、すでに負の方向へ傾いている。

これまで幾度も不利な状況を引っ繰り返しては、東領へ勝利を導いた彼ですらも、今度ばかりはうまく事を運べるか自信がないのだから、それも仕方のない事なのかもしれない。

何より、相手が魔物である事が大きかった。

相手が人ならば、彼等も一角の戦士達だ。今までのように勇猛果敢に、勝利を信じて戦えただろう。

だが、今回の相手は倒すのにも時間がかかる上に、僅かな油断がそのまま命取りになる魔物。しかも…複数での出現という、今までの常識を覆す異常事態だ。百戦錬磨の戦士達も動揺して当然だと言えた。

その上、出現した時間帯も夜明け直前という事もあり、館にいた大半が眠りの中にあった。判断能力は通常時よりも下がっているし、

身体の動きも普段通りとは行かないはずだ。
（だからって、尻尾を巻いて逃げれるかっつーの…！）
弱気になりかける己を叱咤（しった）して、ルウェンは中央棟に辿り着くと、そのままの勢いで扉を蹴破った。
「――　ッ！！」
それと同時に飛び込んできたのは、予想以上にひどい状況と、胸を焼くような濃密な血の匂いだった。
地上三階ある建物の、天井までを吹き抜けにした広い空間。
そこはかつての面影など一切なくし、負傷者の苦悶の声と、彼等の物と思しき鮮血の赤、そして魔物によって破壊されたらしい壁の残骸などによって支配されていた。
「…っ、チクショウ…冗談じゃねえぞ……！！」
湧き上がる怒りを、かろうじて理性で押し留めた。心の内圧を高める事で、彼の戦士としての本能が目覚めてゆく。
――　ここは、すでに戦いの場だ……！

…グルゥアアアゥアア……！

獣とは違う、身の毛もよだつ咆哮が遠くから聞こえると同時に、彼はその場から横へと飛んだ。
すぐさま剣を鞘から抜き放つと、無造作にも見える所作で斜め上へと剣を振り上げる。

…ビシャ…ッ！

重い手応えと同時に、熱く生臭い飛沫が顔にかかった。

…グギャアアアア……！！

遥か頭上、三階部分から恐るべき速さで飛び降りてきたそれは、

ルウェンの攻撃で振り下ろしかけた腕を切り裂かれ、耳障りな絶叫を上げて後ろへとよろめく。
「……」
それは人と蜥蜴を足して割ったような外見をした魔物だった。体格はルウェンより二回りほど大きい。
その滑りを帯びた体表を、青い体液が伝わり落ちるのを無表情に眺めながら、ルウェンは剣を構え直す。
（…浅い……！）
腕の中頃までざっくりと切り裂かれているものの、噂に聞く再生力を考えれば、深手を与えたとは言えないだろう。
実際、見る間に溢れていた体液が乾き、傷口は盛り上がった肉芽によって塞がって行く。ルウェンはぎり、と歯を噛み締めた。
魔物を倒すには、首を落とすか心臓を抉り取るか――　だが、その二つの困難さはどちらも同じ。
前者では咄嗟の防御が効かない背後に回り込む必要があるだろうし、後者は一気に懐に入って胸を切り裂かねばならない。
援護の手があれば不可能ではないだろうが、周囲には彼の手助けが出来る状態にある人間はおらず、一対一となるとどちらの手も厳しいのは明らかだった。
（どうする……）
幸か不幸か、ここにいるのはこの魔物一体だけのようだった。
もしこれで他にも数体魔物がいるのであれば、いかにルウェンでも勝負にはならなかっただろう。だが、一体だけだからこそ、退く訳にも行かなかった。
魔物は今の攻撃で、ルウェンを完全に敵だとみなしたようだ。その瞳が、薄闇の向こうで残忍な光を帯びた事に気付くと、ルウェンは剣の柄を握る手に力を込めた。
（…考える時間を与えては……）
「――　くれないようだなっ！」

ヒュン…ッ！

空気を切り裂いて一瞬で間合いをつめてきた魔物の一撃を、咄嗟に身をかがめる事により紙一重でかわすと、そのまま剣を横薙ぎに払う。

だが相手も同じ手には引っかからない。胴を切り裂くはずの一撃を、恐るべき反射神経で斜め上方へ飛び上がる事で回避する。

そしてそのまま壁を蹴り、体勢を崩しかけたルウェンに向かって身体ごと突進してきた。

「ぐうっ！」

跳ね飛ばされ、受け身を取る余裕もなく、反対側の壁に肩からぶつかる。

したたか打ち付けた全身に衝撃が走り、口の中に血の味が広がった。どうやら口の端を切ったらしい。

「…っ」

衝撃で一瞬暗くなった視界の中、それでもルウェンの身体は横へと動く。

同時に頭のすぐ横を風が走りぬけ、次いでそこにあった壁が崩落する激しい音が響き渡った。

（…――）

もし動かなかったら、恐らく今の一撃でルウェンの頭は潰されていた事だろう。

（やば……）

今更ながらルウェンの心にも明確な焦りが生まれた。そのまま転がって距離を取り、何とか体勢を取り直す。

魔物は今まで渡り合ったどの相手よりも強い。頭ではわかっていたつもりだったが、頭での理解は現実には遠く及ばないものだったらしい。

生まれて初めて感じた死の予感に、ルウェンは額に冷や汗が浮く。しかしそれを拭う事も出来ずに、彼は魔物の動向を見守った。

彼の目前で、魔物は無造作に壁に穴を穿った腕を取り戻すと、再び彼に向き直る。
その様はまるで無力な獲物を前にした勝ち誇る獣のようで、ルウェンは強い違和感を感じずにはいられない。
（…こいつら、本当に頭が獣並みなのか……？）
明確に感じる殺気。
だが、そこに戦いを楽しむような気配を感じるのは何故なのか。
相手を葬り去る事ではなく、この思うがままに腕を振るい、敵と剣を交わらす事に喜びを感じる…戦場に立った時の自分のように。
気のせいと言われればそれまでかもしれない。おそらく、他の人間には感じ取れないだろう。
――　だが、そんな事を考える暇は与えられなかった。
「…な……！？」
ぎょっと目を見開いた先、魔物の持ち上げた手に不意に青白い光が生じる。
一体何事かと見ている内に、その光は人の頭ほどの大きさへと変わったかと思うと、次の瞬間、魔物はそれをルウェンに向けて投げつけていた。
「うわあ！？」
受ける事は流石に躊躇（ためら）われて、慌てて後ろに倒れる事で回避する。
彼の頭上を光は恐ろしい速さで飛び、体勢を整える前に、激しい閃光と共に先程の非ではない破壊音が響き渡った。次いで熱い爆風が襲いかかり、慌てて顔を庇う。
「……――」
流石に魔物から目を外す事は出来ず、背後の状況を確かめる事は出来なかったが――　足元からその衝撃の余波が伝わって来る所を見ると、かなりの威力を先程の光は秘めていたようだ。
――　直撃を受けていたら、一瞬で死ぬにしても果たして五体満足でいられたかどうか。
「…冗談だろ、オイ……」

彼の顔に引き攣った笑みが浮かんだ。
どうしようもない状況に陥った時、人は笑ってしまうという話だが、どうやらそれは本当だったらしい。それくらい、目の前で起こった出来事は衝撃的な事だった。
「魔物が呪術師みてえな技使えるなんざ、聞いた事ねえぞ……！？」
無意識に上ずる声で怒鳴りながら、彼は身を起こして体勢を整える。
（――　無敵じゃねえかよ）
嫌な汗が背を流れるのを感じる。その不快さと戦いながら、ルウェンは第二撃をその手に作り上げた魔物を凝視した。
相手が純粋な肉弾戦を挑んで来るなら、まだ対抗する手段はある。だが、それに加えてこんな破壊力満点の飛び道具まで出されて、どうすればいいと言うのか。
（マジで、やばいかも）
今回の襲撃は、あまりにも『前代未聞』の出来事が多過ぎる。
空気に混じるきな臭い匂いに、ソーロンの指示した火による攻撃の余波が、この館自体にも及んだ事を感じ取る。
…時をそう置かず、この中央棟は炎に包まれる事だろう。
嵐を呼ぶ事の出来る呪術師がいれば、他の建物に被害が及ぶ前に消す事が可能かもしれないが、この状況ではそんな事は望むだけ無駄に違いない。
（――　殿下、逃げろ）
届かないとわかっていながら、彼は心の中で呟いた。
（こいつ等は普通の魔物じゃない…正攻法じゃ無理だ）
力量が圧倒的に違う。人が太刀打ち出来る相手ではない――　少なくとも、今は引くべきだ。
（今の内に、逃げてくれ）
ソーロンが自分達を見捨てて逃亡するような性格ではない事は知っている。だが、彼が死んでしまったら、自分達は本当に犬死になってしまう。

ゆっくりと魔物が腕を持ち上げた。ルウェンは剣を構え、攻撃に備える。

そして。

死の使いはその腕を無慈悲に振り下ろした。一瞬後、激しい閃光と轟音が再び響き渡る。

もうもうと土煙があがる中、確かにそれは嗤(わら)った。

残忍にして冷酷な――　獣並の知性しかないと言われるそれが浮かべたものは、明らかに何らかの意志を感じさせるものだった。

第一章　皇女ミルファ（１０）

…ズゥゥゥ…ン……――

そう遠くはない場所から、何かが崩れ落ちる音が響いてくる。
その衝撃の大きさを示すかのごとく、僅かに時間を置いて足元が震え、窓ガラスがビリビリと音を立てた。
「……」
中央棟より奥、本来ならば領主とその家族が生活を送る場所である領主棟――　現在は東領の反乱軍の本部となっているそこに控えていた人々の顔は、その音が示す事態を想像し、硬く強張る。
もはや言葉はなかった。
互いに顔を合わせ、最後に彼等を束ねる人物――　ソーロンへとその視線は集中する。
その不安を隠さない視線を受け止めて、彼は難しい表情を浮かべたまま、じっと正面を睨みつけていた。
今の衝撃が味方の呪術師が放った術の結果ならばいい。だが、もし…そうでなかったら。
事実、それは彼が考える『最悪の事態』そのものだったのだが、彼等はまだそんな事は有り得ないと信じきっていた。
火によって再生力を下げ、一体ずつ仕留める。
それは魔物の集団を前にして、現時点で彼等が取れるおそらく最上の手段だった。これがもし、駄目だった時――　その場合、次にどんな手を取ればいいのか。
今はただ、信じて待つより他はない。先程ここを飛び出していった、彼の剣の能力と強運とを。
自身の無力さに、無意識に手を握り締める。わかっているのだ。ここで自ら戦いの場に飛び出した所で、逆に敵の思う壺だという事は。

自分の命は、今となっては彼一人だけのものではなく、彼を信じて集った者にとって、守るべき『最後の砦』である事も。
――　だが、落ち着けない。
平和の中で育ったソーロンは、五年の時を経ても、まだ『守られる』事に慣れきっていなかった。そして、自分の為に、顔も知らない誰かが死ぬという事にも。
自分の命を他人任せに出来ない――　その事は、おそらく人間としては長所だろうが、指導者としては欠点にもなり得る事だ。
最悪の事態が起こった時、自分の命を守る為に、時として自分以外のものを切り捨てられる事も必要だというのに。
…他人の命を預かる重責を理解しているが故に、ソーロンは冷酷に振舞う事が出来ない。愚かだとわかっていても、一人この場から逃れるという選択肢を自分では選べないのだ。
そんな彼だからこそ、人々は忠誠を誓い、彼の元に集った事もまた事実ではあったけれども。
(…よもや、こんな事態が起こるとはな)
思い返すのは、先日聞いた言葉だった。
――　身辺にお気をつけなさいませ。狂帝は、南の地を介してこの東へと刺客を送り込んだ可能性がございます……
異母妹・ミルファに仕えていると言った呪術師の言葉は、こうして現実のものとなった訳だ。
あの時、一蹴した自分を苦々しく思うが、同時に今の状況を思い返し、たとえあの言葉を信じて警備を強めても、相手が魔物ならば結果は同じだろうと結論する。
あの呪術師も、おそらくその主であるミルファも、このような事態は想定していなかっただろう。自分も、有り得ない事態に未だに悪い夢ではないかと思える程なのだから。
遠い昔、最後に顔を合わせたまだ幼い頃の姿を思い浮かべ、ソー

ロンは苦々しい思いで語りかける。
（ミルファ…どうやら我等の父は人の道を本当に外れてしまったらしい）
魔物によるこの襲撃が父のものだと決まった訳ではない。だが、ソーロンは心の中で断定していた。
…かつて尊敬していた父は、子の命を奪う為に闇の生き物と手を結んだのだ……――。
そこまでして、自分達の命を奪いたいのか。自分達の命には、そこまでして奪い去らねばならない、どんな理由があるというのか？
この五年、ひたすら考え続けた答えのない問い。
はっきりしている事があるとすれば、もはや父にこの世界を統べる皇帝の資格はないという事、それだけだ。

『皇帝は決して「特別」を作ってはならない。お前に、それが出来るか？　ソーロン』

耳には、最後に父と交わした言葉が今もまだ残っている。
一体どんな話の流れでそんな事を話すようになったのかはもう覚えていないが、その言葉を言った時の、何処か苦しげな表情はいつまで経っても薄れる事はなかった。
――　確かその時、自分は出来る、と答えたと思う。
『特別』を作る事は出来なくても、全てに等しく心を注ぐならば問題はないと思っていたからだ。
だが…今にして思う。
あの言葉は、もしかするとソーロンに対してではなく、皇帝自身の心に対する問いでもあったのではないかと。
父は作ってはならない『特別』を心の中に持ってしまったのではないか。それが――　この事態を引き起こす原因になったのではないのか、と。
…そんな事をふと考え込んでいたソーロンだったが、それは突如

上がった悲鳴で中断された。

「…ヒッ！？」

「うわ！？」

「ま、ま、ま……！？」

一気に恐慌状態に陥り、口々に意味不明の言葉を紡ぐ彼等の視線の先――　窓へと反射的に視線を走らせたソーロンは、そこにあった光景にその目を限界まで見開いた。

窓の外。

まだ闇に支配されたそこに、赤く光る三つの目。

獲物を求めるかのように、こちらを覗き込むその影は、室内の明かりを受けてその異形が僅かに見て取れる。

（…翼……？）

その背にある、鳥のものとはまた異なる歪（いびつ）な形の翼を目にし、ソーロンの驚きは益々深まった。

魔物が複数で現れた事も前代未聞の事だったが、有翼の魔物がいるなどという話も聞いた事がない。そうだ――　この部屋は建物の三階部分にあり、それぞれの部屋の窓にベランダはない。

つまり、こちらを見ているこの魔物は宙を浮いているのだ……！

「…皆、窓から下がれっ！」

それは予感だったのか。

…ガシャ――――　ン！！

ソーロンが怒鳴った瞬間、その部屋にあった窓と言う窓の全ての硝子が、一瞬にして激しい音を立てて弾け散っていた。

それが魔物が自らの翼を振るわせた衝撃によるものだと、気付けた者は果たしてどれだけいただろう。

「ぎゃあッ！」

「ぐわっ！？」
不意の出来事に、対応できず逃げ遅れた者の身体へ、その硝子の雨は無情に降り注いだ。口々に悲鳴を上げ、倒れては激痛にのた打ち回る彼等は、見る間に鮮血に染まってゆく。
降り注いだ硝子が小さかった為に、それは致命傷には至らなかったが、逆に全てを抜き去るのも困難な状態となっていた。
一瞬にして阿鼻叫喚の状況と化した中、床に散った硝子の破片を呆然と見つめながら、ソーロンはそろそろと自らの頬に手を運ぶ。
触れた先に、僅かに濡れた感触。そして、ピリっと走った痛み。飛んだ破片が彼の頬を掠(かす)め、傷つけたのだ。
彼はそのまま無言で、側に置いていた自らの剣を手に取った。そのまま鞘を抜き払う。
「で、殿下……！？」
彼の様子に気付いた者が、驚いたような声で彼を呼ぶ。だが、ソーロンはそちらに目を向ける事なく、言葉だけを返した。
「…腕に覚えのある者は構えよ」
「で、ですが……！」
「お逃げください、殿下！　ここは、我々が……！！」
ようやく状況に気付いたのか、自らの得物を手にしながら彼を庇おうと近寄ってくるのを、ソーロンは厳しい口調で制した。
「私に構うな！！」
「殿下！？」
驚きを隠さない彼等に、ソーロンは流れる血潮で頬を赤く染めたまま、口早に注意を促す。
「相手は魔物だ。今は私の身の事よりも、全力で倒す事に集中しろ！」
魔物は一体、対するソーロン達は負傷者を除いても、五、六名はいる。しかも相手はかなりの巨体だ。
この狭い室内をうまく利用すれば、倒す事も不可能ではないかもしれない――　そう判断した結果だった。

そして、ついに魔物が硝子を取り払った窓枠に手をかける。ミシリ、と耳障りな軋む音がした。

「――　来るぞ！！」

「！！」

ソーロンの声で彼等が反射的に身構えるのと、恐るべき腕力で魔物が掴んだ窓枠を引き千切るのはほぼ同時だった。

窓枠の残骸を背後に放り投げると、魔物は室内を改めてぐるりと見回す。

その赤い三つの瞳は、その場にいた人間一人一人を吟味するように彷徨うと、やがてひたとソーロンに向けられた。

…そして。

「……――」

その口が裂けるように笑みを象(かたど)ったかと思うと、そこから彼等の予想もしない、『言葉』が飛び出したのだった。

「ワレ、《ヨウメイノフンドウ》ミツケタリ…ソノチ、ワレラガタメ、テンビンニササゲヨ」

第一章　皇女ミルファ（１１）

目に緑が優しい。
穏やかな陽射しが降り注ぐ――　陽だまりの庭。明るい光の下、色鮮やかな花が風に揺れる。
（ああ、これは夢だ）
目の前に広がる美しい光景に、ミルファは思った。
何故ならそこは、今の自分からはもっとも遠い場所。何もかもが穏やかで優しかった頃の――　幸福の象徴だから。
その事を証明するかのように、庭の中頃に人影が見えた。
陽射しに輝く、銀の髪。
ほっそりとした、どちらかと言うと痩せ気味の小柄な姿。
十七歳のミルファの目にはそう見える。けれど…かつては、その顔を見上げていたのだ。その違いが、益々これが夢なのだと知らしめるようで、切なさは募った。
声をかける事も出来ずに立ち尽くしていると、やがて向こうの方が彼女に気付いて、光に溶けるような笑顔を見せた。

「ミルファ」

その声に、胸の奥が痛みを訴える。
痛い――　否、熱い。
応えようと思うのに、咽喉の奥で言葉が詰まって、声が出なかった。
そんなミルファの元に、その人は歩み寄って来る。そして、少し心配そうに顔を覗き込むと、宥(なだ)めるように言う。
「どうしたの…何か、あった？」
「……ケアン」
ようやくの思いで名前を呼ぶと、その人――　ケアンは視線で言

葉を促してくれる。
…そう、いつもそうだった。彼はいつも、ミルファの言葉を優先してくれた。
普段は周囲の大人も驚く程に口達者なのに、感情が高ぶり過ぎると途端にうまく思っている通りに話せなくなった自分を、決して急かす事なく、一通り話が終わるまで聞いてくれた。
あの頃、その事がどんなに嬉しかったか。
「…何でもないの」
答えて無理矢理笑顔を顔に貼り付けると、ケアンは心配そうな雰囲気はそのままだったが、ならいいんだ、と笑ってくれた。
見つめてくれる優しい眼差しの色は、今、二人の上にある春の空。
無意識に胸元に手をやると、そこには聖晶の感触があった。
そうだ、これを返さなくては――　そう思い、首からそれを外そうとした、その時。
「…駄目だよ、ミルファ」
静かな口調ながらも、きっぱりとケアンはそれを遮った。
「え？」
「それは身に着けていて。出来る限り…ずっと」
「でも…！　これは、ケアン、あなたの――！」
「…きっと、それは僕の代わりにミルファを守ってくれる」
その瞬間、視界は暗転した。
「ケアン！？」
陽だまりの庭も、ケアンの姿も消え失せ、ミルファは夢である事も忘れて動揺した。
周囲を見回し、先程までそこにいた姿を捜す。けれども、彼の姿はもう二度とミルファの前には現れなかった。
「ケアン！」
必死に呼びかけるミルファの耳に、やがて囁くような声だけが届いた。

――　キヲツケテ、ミルファ。

＋　＋　＋

「…――っ！？」

眠りの最中、嫌な胸騒ぎを感じてミルファは飛び起きた。

視界に飛び込む私室の様子からして、まだ夜は明け切っていない。

額に浮いた冷汗を拭いながら、胸騒ぎの理由を考える。

…確か、何か夢を見ていた。

その内容は目覚めと同時に薄れて消えたものの、何か暗示的な言葉を聞いた気がする。

そう――　『気をつけて』と。

この身に危険が迫っているのだろうか？　確かにその可能性はあるだろう。

今も、父は自分の命を狙っているに違いないのだから。だが…それとはまた別に、嫌な予感を感じるのだ。

もっと別の――。

「…まさか」

閃くと同時に、ミルファは寝台から降りていた。夜着の上に、薄手のショールを羽織るのももどかしく、廊下へ飛び出す。

夜明け前という事もあり、館の中は静まりかえっていた。おそらく、まだ大半の人間が夢の中にいるのだろう。

その静けさに、ミルファが立てる軽い足音だけが響く。

向かう先は、同じ階にある彼女の『影』の私室。いくら彼でも眠っている可能性は高かったが、そうせずにはいられなかった。

「…ザルーム……！」

流石に時間帯を考え、扉を叩かずに押し殺した声で呼びかける。

すぐに応えが返るとは思っていなかったので、もう一度呼びかけようとした時、不意に目の前の扉が開いた。

起きていたのか、それとも眠っていなかったのか――　そのいずれかはわからなかったが、いつもどおりのローブ姿が扉の内から姿を現す。
「…どうぞ、ミルファ様」
中へと招き入れながら、彼は静かにミルファの来訪の意を問うた。
「このような時分に、いかがなさいましたか」
年頃の女性が、このような時分に出歩くのは世間一般では感心されない事だ。
だが、彼はそれを咎めるつもりはないらしく、逆に普通の様子ではないミルファを気遣うような様子すら見せた。
そんな彼の布で隠された顔を見上げ、ミルファは思いつめた目で口を開く。
「…頼みがある」
言いながらも、手は首から下げたケアンの聖晶に伸びている。それはあの始まりの夜以来、不安になったり迷いが生じた時のミルファが見せる癖。
それを目に留めて、ザルームはゆるりと頷いた。
「何なりと。…一体、どのようなご用件でございましょう？」
「無理は承知で頼む。…今から、東領へ行って来てくれないか？」
「…東領……」
「嫌な予感がする。兄上の身に、何か起ころうとしているのではないかと…人や鳩では時間がかかり過ぎる。だから……！」
縋るような口調での願いを、ザルームは無言で受け止めた。
ミルファが自分の為に彼の力を請う事は滅多にない事だ。
彼の力が強大であると知っていながら、どんなに苦境に立とうとぎりぎりまでその手を拒む。禁欲的なまでに。
それだけ、ミルファの動揺が激しいという事なのだろう。
だが――。
やがてザルームの口から紡がれたのは、ミルファの意に反するものだった。

「…申し訳ございません。何なりと、と申し上げましたが…それだけは聞き届けられそうにございません」
「…！？」
返って来た暗い声音は、常以上に沈み、苦痛すら感じさせるものだった。
ミルファの顔が青ざめる。怒りの為ではない。彼が『出来ない』と答えた、その事実の裏にある事態に衝撃を受けた為だ。
「――　何があった…！？」
震える声で問い詰めると、ザルームは僅かに迷う素振りを見せたが、やがて重いその口を開いた。
「…この十日ばかり、東の地へ《目》を飛ばして様子を見ておりましたが、数刻前より全く東の様子が見えなくなりました」
「！」
「何者かがかの地にて、大掛かりな呪術を使用している可能性が…。空間が現在、非常に不安定になっております。今はこちらからは呪術の類を使用する事は出来ません。無理に使用すれば、反発しあい、事態を悪化させる恐れもございますゆえ――」
「そんな……」
嫌な予感が当たった。しかも――　もしかしたら、最悪の形で。
すうっと頭から血の気が引く感覚がし、ミルファはぐっと足に力を入れて耐えた。
今は倒れている場合ではない。それにまだ、全てが終わってしまった訳ではないのだ。
「…今は待つしかないのか」
「はい…お力になれず、申し訳ございません」
唇を噛み締め、ミルファは一刻も早く夜が明ける事を願った。
夜が明ければ人々は目覚め、世界が動き出す。そうすれば、東の状況も多少なりと掴めるはずだ。
この、夜が明ければ――。

第一章　皇女ミルファ（１２）

ぶぅんっ！

重い物が空を切る音がしたかと思うと、次の瞬間、ソーロンの身体は床へと叩きつけられていた。

「ぐうっ……！」

苦痛に顔をしかめながら、今、何が起こったかを分析する。

魔物は窓の所から一歩も動いていない。室内にかろうじて残った僅かな光源で、その全貌がようやくわかる。

――　一番近いのは、やはり人なのだろうか。

二本の足で立つその姿は、それ以外のいずれの生き物にも似てはいない。だが、人の形に近いだけで、人そのものではない。

まず、その背にある翼。羽のように見えたそれが、実際は鱗なのだと気付く。全体の形は蝙蝠の羽に似ており、そこに羽のように鱗がついているのだ。

そして――　異様に長い、腕。

一体どういう構造なのかわからないが、その腕が一瞬にして彼等の元まで伸び、薙ぎ払ったのだとソーロンは分析した。

その巨体に似つかわしくない俊敏な動きだった。しかもその威力はすさまじく、彼の前には数人の人間がいたというのに、その全てを難なく跳ね飛ばしたのだ。

他はと目を向けると、その数名は皆ぐったりと床に転がっていた。生きているのか、死んでいるのか――。

「…コレデジャマ、ナクナッタ」

魔物は何処か楽しげに軋んだ声を上げた。

耳障りな声。

人と異なる声帯で、無理矢理人の言葉を話しているからなのだろうか。発音が不自然というだけでなく、ざらついたその声は聞いて

いて神経に障る。
そもそも、魔物が人の理解出来る言葉を発している事自体、驚きに値する事だったが、もはやソーロンに驚きはなかった。
今夜はきっと、何が起こっても驚かないだろう。すでに彼の精神も飽和状態に達していた。
魔物はゆっくりとその腕を持ち上げた。そして――。
「シスベシ」
それは、死の宣告。
何とか身を起こしたものの、魔物の方が動きは速い。

ブォン！

「…っ！！」
先程よりも速く、腕が動く。
避けねばと思うが、先程の衝撃で身体の自由がまだ利かない。魔物の腕は伸び、その大きな手が彼の首を狙って――。

ガッ！！

激しい衝撃が身体に走り、次いで鈍い、何か硬いものがぶつかり合う音が、すぐ耳元でした。
「……ッハァ、ハァ……ッ」
至近距離で、荒い呼吸音。
鈍痛に支配された身体を捻り、彼は見た。
まさに彼の首を跳ね飛ばそうと伸ばされた手の、鋭い爪。それを受け止めている、ボロボロに刃こぼれした剣と、肩で息をしながらその柄を握る男の姿を。
感じた衝撃は乱暴に突き飛ばされたもので、その男が彼の『剣』だという事を理解するのにしばし時間が必要になった。
「……――　生きてっか、殿下……っ」

無理矢理とも言える形で間に割って入った男の口から、ひどく掠れた声が零れ落ちる。その姿といえば、満身創痍という言葉をそのまま形にしたかのようだった。
ここを出て行った時には無傷だった左の肩当ては無残に千切れ、その下の肉までも抉られている。
自分で止血したのだろう、出血は止まりつつあるようだが、それでも彼の腕は真っ赤に染まっていた。そこだけではない、それ以外にも大小さまざまな傷を彼は負っている。
この男がここまで傷を負った姿は今まで見た事がなく、その事が余計に現実感を失わせた。
「…ルウェン……？」
呆然と名を呼ぶと、男――　彼の剣は、疲労困憊（ひろうこんぱい）といった様子ながらも、その顔ににやりとした笑みを浮かべた。
「よう、殿下。…ご無事で何より……――！」
言い放つと同時に受け止めていた爪を弾き返し、そのまま裂帛（れっぱく）の気合を込めて戻りかけるその手首に自らの愛刀を振るった！
「うおおおおぉぉ――っ！！」

ザンッ！！

それは正に奇跡の為せる技だった。
すでに切れ味を失い、刃こぼれまでしたその刃に、切り裂く力などありはしない。
だが、ルウェンの気迫が込められたその一撃は、魔物の肉に食い込み、岩石のように硬い骨を砕き、手首から先を切り離す事に成功する。

ギャアアァアアァァ……！！！

ごとりと、重い物が落ちる音に重なって、身の毛もよだつ絶叫が

上がった。
流石の再生力も、その身体から切り離されれば及ばない。床に転がった手首から先は、しばらく痙攣していたものの、やがて動かなくなる。
「…ハァッ…ハ、ハァ…ッ…」
呼吸をする度に、咽喉の奥が微かにヒューヒューと乾燥した音を立てる。
その身体が、よろりとよろめいた。
「ルウェン！！」
慌てて立ちあがり駆け寄ると、助け起こす前に恐ろしい力で腕を掴まれた。
痛みに顔を顰めながら、何事かとルウェンの顔を見たソーロンは、はっと息を飲む。
「…ッ、お前、目が……！？」
「――……」
ソーロンの指摘に、忌々しげにルウェンが唇を噛んだ。
先程ではよく見えなかったルウェンの顔の右側――　そこには左肩と同様、無残な傷があった。爪か何かだろうか、目蓋の辺りから頬の辺りまでざっくりと走る傷。
果たして右目が無事なのか、この状態ではわからないが、少なくとも今は見えていないはず。この傷を何処で負ったのか、語られずともソーロンにはわかった。
同時に、もはや打つ手がない事も。
そんなソーロンに、ルウェンは掠れた声で告げた。
「逃げるんだ、殿下…もう、ここは駄目だ」
「…ルウェン、だが……」
「いいから、逃げろ。あんたさえ生きてくれれば、ここで死んだ奴等も浮かばれる……！　わかってるんだろ…ッ、こいつ等の狙いがあんたの命だって事は……！！」
おそらくその身には激痛が走っているだろうに、ルウェンは必死

の形相で言い募る。
腕を掴んだ手はその意志を表わすように、食い込まんばかりだった。
「大丈夫…俺はそう簡単にくたばらないからさ。あんたも言っただろうが、剣を預けた以上、あっさりと死んだりしねえ。だから、ここは俺に任せてあんたは逃げろ！」
それは何の根拠もない言葉。今までならばその言葉はいつだって現実になった。
けれど――　満身創痍の姿で告げられるそれは、明らかに虚勢でしかない。
言うだけ言うと、ようやくその手は彼の腕を放した。…その必死の言葉を、どうして無視する事が出来るだろう。
きっとルウェンはこの言葉を伝える為だけに、ここまで引き返して来たに違いないのだ。
ここで彼の意志を無視して、共に魔族に立ち向かう事も選択の一つだろう。
だが、ソーロンは身を切られる思いで、彼の意思を尊重する事を選んだ。ルウェンから離れ、傷を再生しつつある魔物を流し見る。
魔物の狙いは、この命。ならば――　この場を離れる事が、彼等の命を救う鍵になるかもしれない。
その可能性に気付き、ソーロンの目に決意が宿った。
「…死ぬなよ、ルウェン」
おそらく、この状況でこれほどそぐわない言葉はないだろう。だが、敢えて彼はそう言った。
――　祈りを込めて。
「それは…こっちの台詞だっつーの」
彼の心情を知ってか知らずか、疲れを隠せないながらも、彼の剣は満足そうに笑った。
その笑みを心に刻み、ソーロンは階下に向かう扉へと走る。こうする事でしか、彼を守ろうとする人々に応えられない事実を、苦く

噛みしめながら。

第一章　皇女ミルファ（13）

霞み始めた視界の中、身を翻(ひるがえ)して室外へ出るソーロンの背を見届けると、ルウェンはもはや役に立たなくなった愛刀から、床に転がっていた誰の物かもわからない剣へと持ち替えた。

当然ながら、手に馴染んでいない剣は心許ない。それでもないよりはマシだと、ルウェンは自分に言い聞かせた。

そのまま正面に立つ魔族に目を向けると、切り落とされた手首の傷の再生が終わったのか、今にも睨み殺さんばかりの形相になってこちらを見ていた。

真紅の瞳にあるのは、燃え滾(たぎ)る憎悪。

「…オノレ……タカガ、ヒトノブンザイデ……！！」

その口から飛び出した『言葉』に、ルウェンはぎょっと目を見開いたものの、すぐに自分を取り戻す。

思い出すのは先程、この部屋に戻る前に戦い、苦労の末に倒した魔物の事だった。

＋　＋　＋

光の直撃を免れたものの、左肩を負傷し、一度は死を覚悟した。普通ならとっくに死んでいる。

だが…彼の持つ強運は、その場においても如何なく発揮された。

…ガシャーン……！

遠くで響いた、硝子の砕け散った音。それと未だ舞い上がる土煙が、彼に勝機を齎(もたら)した。

おそらく人よりも何倍も敏感な聴覚のせいだろう。ルウェンには微かにしか聞こえなかったその音に反応し、一瞬気が自分から反れ

る。
それはまさに、千載一遇の機会。それを逃すほど、ルウェンは甘くはない。意識するよりも先に身体が動き、魔物に向かって土煙を味方に一気に詰め寄る。
左肩の傷は深く、思うように動かなかった。だが、それでも右手に握る剣を支える事くらいは可能だ。
当然ながら魔物はすぐに気付き、応戦しようとするも、彼が振るった一撃が僅かに早い。

――ザシュッ！

その剣が切り裂いたのは、首でもなく、心臓でもなかった。
…その、一対の眼。
横一線に切り裂かれた両眼を押さえ、痛みと突然視界を奪われた事による混乱で防御が疎かになったそこを、返す刃で更に一撃を加える。
次は――　首へ！
魔物も本能的に身を守ろうと、見えない目で腕を振り回した。その鋭利な爪が顔の右側を切り裂き、かっと熱が走るが、構わず剣を叩き込む。
ガキッと、途中首の骨で一度その刃は止められたが、ルウェンはそのまま全体重をかけて剣を進め――。
ごとり、と首が落ちた音がするまで、ルウェンはその手に力を加え続けた。相手の動きが完全に止まってさえ、ルウェンは最後の最後までその勝利が信じられずにいた。
魔物の首を一人で落とした。
それは普通なら十分人に誇れる事だ。けれどあまりにも強大な相手過ぎて、その実感はなかった。
（…――　殿下）
傷からの出血はひどく、意識が軽く飛びそうになるのを踏みとど

まったのは、その存在を思いだしたからだ。
「…まだだ……」
魔物はこれ一体だけではない。そしてきっと、相手の狙いはかの人の命に違いないのだ。意識を奮い立たせ、ルウェンは応急的に左腕の傷の止血をすると元来た道を引き返したのだった。

＋　＋　＋

そして――　何とか、ルウェンは間に合う事が出来た。
剣の主の危機を阻む事が出来た事に安堵する。実際、あと少し遅かったらソーロンの命はなかっただろう。
まだ完全に安心出来る状況ではないが、それでも自分の本分を果たせる事を誇らしく思えた。
手慣れぬ剣を手に、魔物と向き合う。
先程の相手はこうしている今でも、よくぞ倒せたと思える相手だった。素早さ、攻撃力、そして――　あの、光の玉。生きているのが不思議なくらいだ。
知能的な部分は今目の前にしている魔物の方が随分と高いようだが、それがなんだというのか。
そう――　少々喋ろうが、それで攻撃力が増す訳ではない。むしろ、その程度なら可愛いものではないか。
あのような呪術まがいの技を使ってくるモノがいたのだ、言葉くらい話しても何の不思議もない。…その声が、聞いていて気持ちの良いものではない事は確かだが。
それに先程の攻撃を受けた限りでは、この魔物は大型だけあって反射速度などは先程より幾分劣る。その代わり、破壊力は先程の魔物よりは上のようだ。
ちらりと、先程持ち替えた愛刀の成れの果てに目を走らせる。今まで一度も刃こぼれした事のなかったそれは、たった二度の戦闘でボロボロになってしまった。

…これが、魔物なのだ。
だが、もはや彼に恐怖はなかった。たった一人で魔物を倒した事、それが彼に希望を与えていた。
――　恐ろしい相手なのは事実。だが、倒せない相手ではない……！
「ユルサジ！！」
魔物の怒声と共に、先程切断された側とは反対側の腕が振るわれる。鈍い唸り声とと共に、それは一瞬にしてルウェンの元へと伸ばされた。
…もう、受け止めるだけの力はない。彼は、一気に勝負に出た――　自分の強運だけを信じて。
元々、足止めが出来ればと思ってここに残ったのだ。今さら惜しむ命などない。
「！？」
魔物が狼狽したような表情を一瞬見せる。それを目の端で確認し、彼の口元に知らず笑みが浮かんだ。
（…勝つのは、俺だ……！！）
右側から飛んだ腕の動きなど、右目の見えない今は捉えられるはずもない。
そう判断したルウェンは、その爪が彼を捕らえる前に前に飛び出し、残った力を振り絞って一息に懐に飛び込んだ。
身体に対し、長すぎる腕が仇となった。魔物の反撃が僅かに遅れる。
…そこを。
「うるぁああッ！！」
全気力を総動員し、ルウェンはその一撃に賭けた。
狙うは――　心臓！！

……――　ドスッ！

防御など何も考えない、捨て身の体重をかけた一撃により、剣は魔物の身体に柄まで埋まった。同時に魔物の動きが止まる。

それは正に、戻ったその爪が彼の背を切り裂かんとした寸前。

ここで剣を引き抜けば、すぐさま再生が始まり、魔物が甦る。ルウェンは動きが止まってもなお、貫く腕に力を込めた。

…二度の激闘で、もはや限界を迎えた体が動く事もままならなくなっていた事も理由の一つだったが。

…グラ……ッ……

窓枠を取り除いた場所にしがみ付くように立っていたその巨体は、支えを失い、重力の支配を受けて窓の外側へと傾く。

心臓を貫かれ、仮死状態にあるはずのその身体が、まるで反応したように腕を動かし、空を掻く。だが、それよりも落下の方が早かった。

三階の高さから、背を下にその身体は落ちる。

ルウェンはその手を離さなかった。そのまま大地に魔物の身体を縫い付けんばかりに、肉に食い込んだ剣を握り、魔物と共に落下する。

…やがて闇の中に、重い何かが地面に叩きつけられる音が響いた。

＋　＋　＋

ルウェンを残し、部屋を後にしたソーロンは、一路地下へと向かっていた。

そこには、この館が建てられた時に有事の際を考えて作られた非常脱出路がある。この館が東の反乱軍の本拠となる以前、一度とし

て使用される事のなかった場所だ。
おそらく、この館はすでに魔物に取り囲まれている。地上から脱出するのは、困難である以前に無謀と言えるだろう。そう判断した結果だった。
無人の廊下を走り、階段を一気に駆け下りる。まだここまで魔物は進入していないらしく、途中で襲われる事はなかった。

…ズゥ……ン……

息を切らせながら、ソーロンが地下へ向かう階段へ辿り着いた時、外で大きな物が地面に叩きつけられた音が響いてきた。
「……！？」
もしやと反射的に足を止め、振り返りかける自分を、自制心を最大に働かせて押し留める。
耳に甦ったのは、先程後を任せた彼の剣の言葉。

『あんたさえ生きてくれれば、ここで死んだ奴等も浮かばれる…！』

掴まれた時の腕の痛みと共にその言葉を思い出し、ぎり、と奥歯を噛み締めた。
自分は――　無力だ。あまりにも。
命がけで自分を守る彼等に、してやれる事が生き延びる事だけだとは。己の不甲斐なさに情けなくなる。しかし結局の所、今の自分に出来る事はこれしかないのだ。
今、自分が剣を片手に戦いに参入したとしても、事態を悪化させる可能性が高まるばかりなのだから。
ソーロンとて、この五年を無為に過ごした訳ではない。自ら戦いの場に赴き、剣を合わせた事も幾度もある。
…だが、今回は勝手が違う。
相手は人間ではない。しかも、今までの常識とされていたものが

悉く覆えされた異常事態だ。
果たして現在、どれ程の人間が生き延びているかわからないが、彼等の動揺は相当のものだろう。
そんな所に自分がのこのこ出てゆけば、彼等は自分を守ろうとするが故に己の身を守れず、無駄に命を落としかねない。
そんな危険を犯す訳には行かなかった。何より、それは彼等を代表して彼に逃げる事を訴えたルウェンを裏切る行為になる。
何も出来ない…しかしその代わり、自分がここを去れば、もしかしたら魔物をこの館の外へ引き付ける事が出来るかもしれない。
そこまで行かなくても、注意を惹く事くらいは出来るはずだ。…魔物達の狙いが、この命ならば。
今は、それだけが彼の心を支える僅かな希望の光。そう信じなければとてもやり切れなかった。
（…済まない）
ソーロンは心の内で詫び、迷いを振り切るように一度頭を振ると、地下へと足を踏み入れた。

第一章　皇女ミルファ（１４）

地下へと辿り着いたソーロンは、そのまま奥の倉庫へと足を向けた。

微かに漂う、黴（かび）の臭い。

倉庫とは名ばかりで、今まで長い事使用されていなかった事を如実に物語っている。

金属製の扉は、鍵がかかっていない代わりに重く、それなりに鍛えているソーロンですらも、一人では開くのにかなりの力を必要とした。

蝶番（ちょうつがい）が神経に障る軋み声を上げ、その場の湿った空気に錆の臭いが混じる。

苦心の末に開いたそこは、がらんとした石造りの部屋。

棚が設（しつら）えてあるものの、見せ掛けだけで実際に使用されていない事が、その上に厚く積もった埃で知れる。

ろくな光源のないその室内に、ソーロンは迷う事なく足を踏み入れ、その一角を目指した。

石が敷き詰められた床――　その一部分に手を伸ばし、周辺を探る。すると、僅かに違う手触りの部分に指が触れた。

（…ここか）

ソーロンはそれを確認すると、すぐさまその石と周囲の石の間の、ごく僅かな隙間に手にした剣の刃を食い込ませる。

ギリッ、と剣先が悲鳴を上げるが、構わず腕に力を込め、梃子の原理を利用してその石を持ち上げた。

…ガゴッ

何かが外れる音と共に、手は鈍い手応えを感じている。ソーロンは浮き上がったその石を持ち上げ、横へとずらした。

固く閉ざされていた、更に深い地下へと続く道。薄闇に見える石段は先も見えない闇へと続いている。

「……」

流石に光源を何一つ持たずにそこへ足を踏み入れるのは躊躇(ちゅうちょ)した。だが、今更上へ取りに上がる猶予(ゆうよ)もない。

ソーロンは一度深呼吸すると、意を決してその石段へと足を進めた。

狭いそこは、人一人が通るのにやっとな上に、倉庫内よりもずっとじめじめとしていて、いささか彼を閉口させた。…だが、ここを行くしか道はない。

そろそろと石段を降りながら、途中で気付いて先程こじ開けた石をずらし、内側から出来るだけ元通りに見えるようにまた塞ぐ。

途端に視界は完全な闇に支配され、足元すらも覚束(おぼつか)なくなるが、あからさまに逃亡の跡を残す愚は冒せない。

脱出路は一本道。目の利かない闇の中、脇道のないそこで背後から襲われれば、ろくな対処が出来ないからだ。

やがて狭い石段は終わりを告げ、足は平らな道を踏みしめる。

苔でも生えているのか、ぬるりとした感触を足は感じ取ったが、歩くのに支障がある程ではなかった。

（…行くしかない）

視界の先にあるのは、真の闇。果てが何処にあるのかさえ掴めぬそこを、ソーロンはそろそろと壁伝いに歩き始める。

進行方向から、微かに潮の香を漂わせる微風が吹いている。それだけが頼りだ。

この通路の先は、東領の神殿を束ねる東の主神殿がある。そこへと続く道が、脱出路になったのには確たる理由が存在していた。

神殿に仕える神官は、自ら殺生を行う事を禁じられ、攻撃という点においては何一つ出来ない。だが、彼等はその代わりに守りの術に長けている。

生まれ持った聖晶の力に加え、唯一神ラーマナに授けられた神力

により、呪術に似て異なる技を使用出来る者も少なくないという。
ソーロンも実際に目にした事はないが、彼等の能力は今までの歴史が裏付けしている。
（そこでしばらく匿（かくま）って貰わねばなるまいな……）
苦々しく思いつつも、魔物の集団に手も足も出ない今、彼等の手を借りるより他はないだろう。果たして彼等の技が、魔物相手に何処まで通用するものかわかったものではないが。
基本的に神殿は人を拒まない。
主神殿ではそういう事も少ないだろうが、各地に点在する地方神殿は寄る辺のない旅人が頼る事も多く、医師や施療師のいない村が近ければその代行のような事も行うという。
唯一神ラーマナの教義の一つが、『博愛』である以上、命の危険に直面するソーロンを見殺しにする事はないだろう。それに――神殿的に、ソーロンは無視出来ない存在のはずだ。
遠い面影は、南に居る妹の物よりもずっと幼い。
（…『聖女』、か）
その呼び名を持つ、もう一人の妹。今は西の地にいるその存在を思い返し、ソーロンは苦々しい思いを抱く。
会話すらろくに交わした事もなく、直接会った事だって数えるほど。
挙兵したミルファと違い、長じた今も直接のやり取りは皆無だ。果たして彼女は、自ら父へと剣を向ける自分やミルファをどう思っているのだろう。
延々と何処まで続くのかわからない闇の中、そんな事を考える。何か考えていなければ、自分を見失いそうだった。
――そう、ソーロンもわかっているのだ。自分の行いが決して正しいものではない事を。
狂ったとしても、『父』だ。剣を向けるはおろかその命を奪えば、それは罪になる。肉親殺しは『正しい在り方』を第一とするラーマナの教義において大罪だ。

それだけでない。自分の命を守る為、多くの命を犠牲にした。いくら彼等が自ら命を投げ出したのだとしても、彼等が命を落とす理由はない。

皇帝になるには神殿側の承認が必要となる。

そんな罪を犯した身を、果たして神殿が看過するのか――。

進むにつれ、やがて目が闇に慣れてきた。手に触れる壁の感触だけを頼りに進んでいたせいで、遅々として進まなかった歩みが少しずつ速くなる。

果たして、どれ程歩いたのか。時間の推移のわからない場所だが、少なくとも一刻は歩いているだろう。

やがて、前方からの空気の流れに変化が現れ始めた。

少しずつ強まる、潮の香り。耳を澄ますと、遠くから打ち寄せる波の音も微かに聞こえてきた。

――　出口は、近い。

確信すると、無意識の内に足は速まった。

東の主神殿はアーダの最東端に置かれている。そこは、世界で最初に太陽の光を浴びる場所。海の匂いは、海岸線ぎりぎりに建てられたそこが近い証なのだ。

やがてソーロンは、何処までも続くかに見えた通路の終焉へと辿り着いた。

手探りで周辺を探ると、ここへ降りる時に使用したような石段を発見する。ともすれば踏み外しそうなそこを登りつめ、入り口と同様に出口を塞いでいる石に手をかけた。

パラパラと隙間に詰まっていたと思われる土が落ち、彼に降りかかったが、それに構わず力をこめると、手応えと同時に石が僅かにずれ、そこから微かな光が差し込んでくる。

細い、ともすれば消えてしまいそうなその光は、それでもささくれ立っていたソーロンの心を救い上げるのに十分だった。

（…夜明けだ）

その光は、彼の目には悪夢の終わりを告げる象徴のように見えた。

光に飢えていたかのように、ソーロンは生じた隙間に指を無理矢理ねじ込み、力任せに石をずらす。
古井戸を模したその出口から身体を引っ張り上げた瞬間、明るい光に包まれた。目前には海があった。その海面を黄金色に染め、太陽が僅かに姿を見せている。
その光景は過去に幾度か目にした事もあったのに、今のこの時ほど美しいと感じた事はないように思えた。
これほどに光が心を癒すなど、思いもしていなかった。
知らずその場に立ちつくし、その輝きに見入る。今まで張り詰めていた緊張の糸が緩んだのかもしれない。すぐ側に神殿が見えていた事も、理由の一つだろう。
…安堵感に支配された彼は、それ故に気付かなかった。

「――　チェラータ・バドゥ・ライ・シェルク・カージュ……」

「…！？」
何処からともなく聞こえた声に、はっと我に返ったソーロンは、声の主を探そうとして異変に気付いた。
一体、どうしたと言うのか。身体の自由が利かない……！
焦燥感を感じて青褪める彼を嘲笑うように、声は殊更淡々と言葉を紡ぐ。
「ライ・マキュール・マーナ・ディアス・ウェル・サザーラ・ティ・イ・レレーラ・ペイザ――」
「ぐ…あ……ッ！？」
耳慣れない異質な音の羅列が耳へ届く度に、針で刺すような痛みが全身に走る。だが自由を奪われた身体では、苦痛に喘ぐ事は出来ても、指一本動かす事は不可能だった。
一体自分の身に何が起こったのか、ソーロンにはわからなかった。痛みに耐え、歯を噛み締めながら、かろうじて動く目を動かして周囲を探る。

（…何者…ッ…？）
視界には何者の姿も見えない。だが、彼の疑問が聞こえたかのように、すぐ背後から声が返った。
「――　私が何者かなど、知る必要はありますまい……？」
くぐもった声は、男のものとも女のものともわからないもの。ただ、その声に潜む毒にぞわりと全身が総毛だった。
「貴方はここで、死ぬのですからね」
「！」
不吉な言葉と共に、氷のように冷たい指が首筋に触れる。それは細く、肉のない――　さながら骨そのもののような。
「…呪術、師…か……？」
何故そのような事を連想したのかわからないまま問うと、背後の声は愉快そうに咽喉の奥で笑う。
「ふ…まだ、口が利けるとは。流石は皇帝の血を継ぐ者と申し上げるべきか――」
感心したように紡がれた言葉は、同時に嘲笑を含んでいた。

第一章　皇女ミルファ（15）

「――　ッ！！」

次の瞬間、ぎりっと心臓をわしづかみにされたような激痛が胸を走り、ソーロンは声にならない絶叫を上げた。

一体どうやっているのかはまったくわからないが、それが背後の人物の仕業である事は、言われずともわかった。

「…ああ、夜が明けてしまう。早々に片を着けるとしましょうか」

ふいと首から指が離れたと思うと、背後にいた人物が彼の前へ移動する。

頭からすっぽりと全身を覆い隠すような黒い布に、身体の線を見せない同色のローブ。朝焼けを背に立つその姿は、以前、彼の前に姿を見せた呪術師を思い起こさせた。

そう思うと、聞こえてくる声までもが似て聞こえるから不思議だ。

「…さて、殿下」

「……？」

「このまま私に、生きながら心臓を潰されるのと――」

布の内から、パチリと指を鳴らす音。

「…我が下僕に八つ裂きにされるのと、どちらがお好みですか……？」

「！？」

ぎょっと目を見開いたのは、その言葉の残酷さの為ではなかった。

…ゆっくりと、だが確実に昇り行く朝日。

その光の中、何もないはずの空間がゆらりと揺らいだかと思うと、そこから数人の人間が現れたのだ。いずれも帝軍の甲冑を身に着け、剣すら帯びている。

その事自体、驚きに値する事だっただろうが、次の瞬間、ソーロンの目前で起こった出来事は、この夜に目撃したいずれの衝撃も凌駕するものだった。

…グ…ゥァァァァァ〜〜〜〜ッ！！！

その咽喉から迸(ほとばし)ったのは、到底人のものとは思えぬ、獣じみた咆哮。

完全に明るみに姿を現したと思った矢先、彼等はそんな叫びを上げて突然咽喉を掻き毟らんばかりに苦しみ始めたのだ。

――　そして。

「な…ッ！？」

形が、変わってゆく。

少しずつ明るさを増す陽光がその変容してゆく様を照らし出し、身動きならない彼は、目を反らす事も出来ずにその全てを見届ける事になった。

四肢が変形し、見る間にそれは人から人以外のものへと姿を変えてゆく。

ある者は腕が伸び、ある者はその皮膚が盛り上がり硬い外皮に変わった。ある者は長い牙を、ある者は鋭い爪を、ある者は――。

変貌が進むにつれ、茫洋としていた彼等の目に狂気にも似た『飢え』が宿るのが、遠目でもはっきりとわかった。

知性の欠片もない、元が人だったとは思えぬ異形の姿を持つ血に飢えた生き物――　そこにいたのは、紛れもなく自分達が『魔物』と呼んでいた存在だった。

「おや。…少し刺激が強すぎましたか？」

すぐ側でくすくすと忍び笑う声。

「…これが、あなた方が『魔物』と呼ぶものの正体ですよ。先程領館を襲ったのも彼等の仲間です」

まるで種明かしをするように告げられた言葉は、到底信じられるような内容ではなかった。

呆然と見守るソーロンに、声は楽しげに聞きたくもない解説を続けてくれる。

「いろいろと条件がありますが、《陰冥》の力を受けた者にとって、こちらの世界の光は毒――。肉体を活性化させ、爆発的な能力向上をもたらしますが、代わりに知性は完全に失われ――」

ガルゥアァアア……！！

「……ッ！！！」

話を遮るように、魔物が咆哮を上げ次々にソーロンへと襲い掛かる！

…ガシュ……ッ！

「…ァ……――！！」

首筋、腕、肩――　焼け付くような痛みが走ったと思うと、そこから熱い血が吹き出し、彼の身体を瞬く間に真紅に染めた。

「ア…ゥ、グ……ッ」

身体の自由を封じられているのが、この時ばかりは幸いだった。そうでもなければ、おそらく恥も外聞もなく牙を立てる魔物を振り払おうとのた打ち回っただろうし、痛みに叫んでいただろう。

「…ああ、間に合いませんでしたか。もう少し我慢すると思ったのですがねえ……」

くすくすと笑いながら、黒衣の人物は魔物に牙を立てられたソーロンへと歩み寄る。

「こんな風に、血を求め徘徊するだけの生き物に成り果ててしまうのですよ。もうこうなるとどうしようもない。…苦しそうですね、殿下？」

「……ッ」

ギリギリと牙が肉に食い込み、その度に目の前が赤く染まった。痛みの閾値を越えてしまったのか、それとも血が流れ過ぎたのか、苦痛よりも寒気を感じてソーロンは唇を震わせる。

指一本動かせない腕から、生命の源は滴り落ち、ボタボタと音を立てて地面へ吸い込まれて行く。しかし――　そこまでされても、まだ彼の元へ『死』は訪れなかった。
（ここまで、か……）
流石にこの状態で生き延びられるとは彼も思えなかった。
脳裏に様々な人々の顔が思い浮かんだ。今は亡き母や母の違う兄弟達、父である皇帝、自分を逃がそうとしたルウェンを筆頭とした東領で側近くに仕えた部下達、そして――　最後に思い浮かんだのは、緊張でもしていたのか、硬い表情で無理矢理笑顔を浮かべていた十二歳の少女の姿。
（ミルファ……）
結局、歩み寄れないままだったと思う。一度くらいは顔を合わせておけば良かった。今ここで自分が命を落とせば、おそらく次に狙われるとしたら、確実に末の妹だろう。
自分の最後を知った時、彼女は何を思うだろう。偉そうな事を言っておいて不甲斐ないと思うだろうか。それとも――　今の自分と同じような後悔を感じるのだろうか。
ぎり、と奥歯を噛み締める。何も出来ずにここで終わるとしても、せめて無様な最後だけは見せまいと思った。
その様子を布越しに満足そうに眺め、
「…そうだ。折角ですから、記憶を頂いておくとしますか。死んでしまうと、取り出すのも面倒ですからね――」
ふと思いついたようにそんな事を言いながら、その骨のような指が彼の眉間へと伸びる。
指が触れたと認識すると同時に、布の内からまた不可思議な響きの言葉が紡がれた。
「…シェルキータ・タリム・ディアス・ナ・ケーゼン・フィッツ・リリト・テア・ヴァイズ」
「――！！」
全身に走る痛みに加え、今度は指が触れている部分から雷撃に打

たれたような衝撃が走った。
「メイ・アーワ・タリム…カリェン・ライ・デ・ロティ」
（な、…なに、が……？）
言葉に合わせて、ざわざわと全身の細胞が蠢（うごめ）く。肌の下を虫が這うような感覚に、吐き気すら覚えた。
（何が、起こっているん…だ……！？）
「ライ・イスト・マーナ・マティオス――　メイ・アーワ・タリム・イ・スピル・アレル……！」
「……！？」
詠唱が完了した瞬間、彼の中にあった全ての記憶が怒涛のように脳裏を駆け抜けた。
大きく目を見開き、ソーロンの肩が衝撃に跳ね、食らいついた魔物の牙がさらに深く食い込むがもはやそれは気にもならない。痛みすら凌駕する衝撃だった。
生まれた瞬間から、今現在までの記憶にあるものもないものも、その全てが甦り、そして奪い去られるのをソーロンは感じ取る。
（あ、あ、…あ――――　！！）
喜びも、怒りも、悲しみも、苦しみも。『己』を構成するその全てを――。
時間にして、それは一瞬の出来事だった。
ふっと何事もなかったかのように指が離れると、極限まで見開いたソーロンの目から、意識のない涙が零れ落ちた。
肉体と精神とを同時に引き裂かれた彼に、もはや個としての意識はない。それはただ、生きているだけの抜け殻だった。
「…さて、死んでいただきますか」
まるで一仕事を終えたように呟くと、再びその唇は特徴的な言葉を紡ぐ。
「ディスティーザ・ソアラ……」
びくん、と一度だけソーロンの身体が跳ね、その目から完全に光が失われる。

――　それが、最後だった。
「…フ、フフ……フ、フハハハハ……！！！」
愉快で堪らないと言わんばかりに肩を揺らし、遠慮のない哄笑が響くと同時に、それまでソーロンの身体を大地に縛り付けていた術が解除される。
それを待ちかねたように、その身体に食らいついていた魔物は、狂喜も露にその肉を噛み千切る。濃密な血の臭いが周囲に漂い、次いで肉を咀嚼（そしゃく）する湿った音が響いた。
「――　その程度にしておけ」
無心に肉を食む魔物へ、軽蔑しきった冷たい声をかける。そこに僅かに混じる皮肉な響きに、魔物達は気付かない。
「…光が毒ならば、《分銅》の血は麻薬――　お前達程度では御せるまい」
やがてその言葉を証明するかのように、ソーロンの血肉を口にしていた魔物達はやがて互いに襲い掛かり、殺し合いを始める。
互いに噛み付き、さながら共食いの様相を呈した浅ましい姿を制止するでもなく眺めながら、光を遮る布の内で陰気な声は呟いた。
「――　残るは皇女が二人……。さて、どう料理しようか……？」

第一章　皇女ミルファ（１６）

東の空が僅かに明るくなる。
闇が薄れ、その光は少しずつまだ眠りの中にある世界を、明るく照らし出して行く。
――　夜明けの訪れだ。
清々しいその光は、一人、南の領館の中でもっとも高い建造物――　物見の塔に立つローブ姿の人影をも闇から浮かび上がらせた。

…バサ……ッ

無音の世界にそんな軽い羽音が響くと、その人影ははっと弾かれたように音のした方角へと顔を向けた。
視線の先にいたのは、一匹の蝙蝠。
それを確認した彼はしばらく呆然と立ち尽くし、やがて我に返ったように骨のように痩せ細った腕を天へと伸ばす。
蝙蝠はひらりと宙で身を翻したかと思うと、自分を見上げる人物――　ザルームの差し出した腕に止まるり、何かを語りかけるように鳴き声を上げ始めた。
キィキィと少々神経に障るその声に耳を傾けていた彼は、一瞬びくりとその肩を震わせると、やがて暗く響く声で呟いた。
「…わかって、おります……」
その声は衝撃の為か、それとも別に理由があるのか、まったく感情のこもらないものだった。
蝙蝠はひとしきり何事かを訴えるように鳴くと、やがて再び舞い上がり、暁闇（ぎょうあん）の空へ吸い込まれるように姿を消す。それを見送り、ザルームは再び東の空へと目を向けた。
天にあるのは、これから世界を支配する太陽と――　間もなく眠りに就こうとしている月。果たして彼は、そのどちらを見つめてい

たのか……。
「――　生き残った皇帝の血を引く者は、これで二人……」
呟いた声に混じるのは、何処までも苦い自嘲。
「…『契約を忘れる事なかれ』――　か……」
その微かな呟きは誰の耳に届く事なく、静寂の支配する空気に溶けて消えた。

＋　＋　＋

「兄上が…亡くなられた……――　？」
ザルームから齎(もたら)された知らせに、ミルファは呆然とその言葉を口にした。その白い顔には疲労が色濃く漂っている。結局、ザルームの部屋を辞した後、一睡も出来なかった為だ。
兄の死――　それは、実際に東で何事かが起こっていた場合、十分に可能性があるとミルファも考えていたこと。
だが、いざそれが現実になってしまうと、やはり信じられずに自分の耳を疑った。
「…本当に……？」
確認を取る声が、自分でも驚く程に震えていた。
「…実際に現場を確認した訳ではございませんので、確証は得られておりませんが…生存の可能性は、限りなく低いかと」
対するザルームの言葉も常より暗い。その事が余計に事実だと強調しているようで、知らずミルファは自分の胸元を縋るように掴んだ。
半分とは言え血が繋がっているからだろうか。ザルームは断言していない。兄が生きている可能性もあるはずなのに、心の何処かがその死を理解している。
虫の知らせというのは、こういう事を言うのかもしれない。
（…――　いつかは、分かり合えると思っていたのに）
胸に湧き上がったのは、そんな後悔だった。

今は無理でも、全てが終われば血の繋がった兄妹として、手を取り合う事も出来ると思っていた。兄が皇帝の座に就く暁には、その手助けが出来ればとも思っていた。

――　でも、もうそれはただの夢。もはや、ソーロンと直接言葉を交わす事も、誤解を解く事も出来ないのだ。

（甘かったのか？　…あの時、警告だけではなく、こちらから兵を派遣すれば良かったのか……？）

十日という期間では、東領に入るのがやっとで、変事には間に合わなかったかもしれない。

けれどもそうする事で敵方に重圧をかけ、事を未然に防ぐ事も出来たのではないか――　そう思い始めると、心は千々に乱れた。

「…ザルーム」

「はい」

「――　済まないが、一人にしてくれないか……？」

ようやくの思いで口にした言葉に、ザルームは何も言わず、一礼するとそのまま退出して行く。

見慣れた赤黒いローブが扉の向こうに消えるのを見送って、ミルファはぎり、とその唇を噛み締めた。

なぐさめの言葉を言わずにいてくれたザルームに、心の中で感謝する。今、そのような事を言われたら、おそらく自分はさらに自己嫌悪に陥っただろう。

…命は、喪われたら二度と戻る事はない。

取り返しのつかないその事実を、もうすでに知っていたはずなのに――　ミルファは打ちのめされた。

また自分は手を伸ばせば守れたかもしれない大切なものを、自分の心が弱いばかりにみすみす喪ってしまったのだ――。

（…――　しっかり、しなくては……）

心は切り裂かれるような痛みを訴えるのに、ミルファの頭は事態を冷静に解析する。

（兄上が亡くなられたとしたら、狂帝に抗う勢力はこの南だけ。―

―　これから先の戦いは、もっと苦しいものになる……）
今まで東と南とで二分されていた帝軍が、全てこちらに向かって来る。
そして東領をまとめるソーロンが真実、志半ばで倒れたのなら、彼が率いていた兵士達がこちらへ流れて来る可能性は少なくない。
そう遠くはない将来、南領の兵士のみならず、彼等の命をも預かる覚悟をしなくてはならないだろう。
もう、この戦いはミルファ個人の目的を果たす為だけの戦いではなくなったのだ。この重責に耐えるには、もっと強い心が必要だ。
そうでなければ――　兄も許すまい。
だが、そう思ってもミルファの心は不安で揺れる。頭では事態の深刻さを理解していても、心はそれを受け入れきれない。
簡単に受け入れられる、はずもない。兄の死すら、受け入れるだけでも精一杯だと言うのに。
「――　何故……！？」
身を切られるような絶望の中、口をついて出たのはそんな疑問の言葉だった。
（何故、私達を殺すのですか。何故、心を乱されたのですか――お父様……！！）
きつく、血の滲むほどに唇を噛み締め、ミルファは心の内で帝都にいる父へと訴えかける。
今までに、何度も何度も、数え切れないほど繰り返した、届く事のない問いかけ。
胸が張り裂けるようなそれは、けれどもやはり憎しみではなかった。哀しみと絶望からから生まれた、やりきれない感情。
いっそ、憎めたらどんなに楽だろうと思えるほど、それはミルファの心を苛(さいな)む。
涙は、出なかった。自分に泣く資格はないと思った。
この苦しみと痛みは、泣いて癒されるものではない。だからこのまま抱えて進む事を、ミルファは決意した。

…涙を捨て、生きる事を。

＋　＋　＋

第一皇子ソーロンの訃報が南領の地に正式にもたらされたのは、その明け方から半月が過ぎる頃だった。

鳩すらも飛ばせない混乱状態に東領が陥っていた事が明らかになるのは、更にその少し後の事となる。

やって来たのはたった一人の男。

人の足なら一月はかかるその道程を、いかなる手段を使ったのか、人間離れした早さで踏破したその男は、満身創痍の身体を引きずりながらもソーロンの死を告げると、その有様に驚く南領の兵士に言い放った。

「皇女ミルファに会わせろ」

理由も語らず、敬う態度も見せない失礼甚だしい言い草だったが、その鬼気迫る様子に人々は飲まれた。

下手に逆らうとただでは済まない――　そんな殺伐とした空気を、男は纏っていたのだ。

だが、彼等がどう対処しようかと悩む必要はなかった。

ほぼ不眠不休でここまで来た為か、全身に負った傷がひどかった為か、言うだけ言うと男は倒れ、そのまま意識を失ったからだ。

「――　…そう、そんな事が」

報告を受けたミルファは、静かな眼差しを控える伝令に向けた。

「その男の名は？」

尋ねられ、伝令の少年は緊張した面持ちで顔を上げた。いつだったか、ウルテ襲撃を伝えたあの少年だ。

少年は相変わらずの慣れない様子で、主の問いへ答える。

「それが、名乗る前に意識を失ってしまったそうです。現在、医師

と施療士が共に治療に当たっております。…いかがなさいますか？」
何処の誰ともわからない人間の上に、皇女に対し名指しで面会を求める遠慮のなさ。普通ならば、まず様子を見る所だろう。
だが――。
「その男の話に興味がある。意識が戻り次第、知らせなさい」
「は、はい！」
ミルファの言葉に少年は落ち着きのない様子で礼を取り、慌しく退出してゆく。
その背が扉の向こうへ消えるのを確認してから、ミルファは彼女の『影』を呼んだ。
「…ザルーム」
「――　こちらに」
背後から聞こえた暗い声に振り向きもせず、ミルファは感情のこもらない声で告げた。
「私は決めたぞ、ザルーム」
エメラルドの瞳を硬く光らせ、迷いを振り切った顔で彼女は宣言する。
「私は――　父を討つ」
それは今まで迷い続けていた問いへ、彼女が出した結論だった。もはや、一目会って話したいという個人的な願いなど抱けない。
背後の気配は、その言葉に動揺する事はなかった。その沈黙にようやく顔をそちらに向けると、ミルファは問いかける。
「もう、二度と戻れない道だ。間違っていようが、正しかろうが、私はその道を進む。…それでもお前は、私に従うか？」
――　それは試すような言葉。
しかしザルームは迷う素振りもなく、静かに頷くとその場に跪いた。
「何処へなりとも、お供いたします」
やがて返ったその言葉に、ミルファはその表情を僅かに緩めた。
その顔は、もはや自らの選択に悩んでいた十七歳の少女のもので

はなかった。

挙兵してから二年。
ここから、ミルファの真の戦いは始まった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1753t/

天秤の月

2011年9月2日03時18分発行